
空の落書き

綾瀬メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の落書き

【Nコード】

N0973Y

【作者名】

綾瀬メグ

【あらすじ】

新一と蘭、平次に隠された、残酷で悲しい過去。

一度目の人生と記憶を失ったまま、自分の存在理由に疑問を持つ新一。

例え結ばなくても、ずっと彼の傍に居たいと願う蘭。

二人を繋いでいた物は、交わした約束と偽物の空。

彼等が最後に出した答えは……

特に新一の設定はパラレルですのでご了承ください。
20話で完結です。

1（彼女の秘密）

『世界で一番嫌いな物は？』

―その質問には迷わず即答できる。

「お化けとか幽霊です。」

そんな物存在しないのに！と笑い飛ばすか。

それは怖いよね…と身震いしながら同意するか。

私の答えを聞いたら、誰もがどちらかの反応を示すんだろう。

本当の気持ちは誰にも理解出来るはずがない。

誰かに話した事もない。

…信じてくれるはず、ないんだから。

この世界中で誰も知らない、私だけの秘密。

—空^{そら}の落書き—

世の中には、数え切れない怖い話や怪談が存在する。

学校の七不思議や、禁じられた遊び。

この話を聞いたら。。。しないと駄目だとか、何人に話さないと呪われるだとか。

私が住んでいる街、米花町にも隠れた心霊スポットがある。

駅から数分歩いた2丁目、21番地。

住宅街に突如現れる古びた大きな洋館。

周りの景色とは全く似合わない、違和感だらけの異様な存在感のそれは、何年も前から誰も住んで居ないせいで雑草が生い茂り、立派な門は錆び付いている。

子供達には有名過ぎる噂。

上から2段目・さらに左から4番目の窓…

満月の晩には、無人の筈のそこに人影が映り込む。

その姿を見た者は洋館に引きずり込まれ、二度と朝を迎える事は叶わない…

そんなよくある怪談話。

「…それがこの”エトー”の幽霊屋敷なんだってよ!」

「元太君…これは”エトー”じゃなくて”クドウ”って読むですよ?」

「うつせーな!んなモン何でもいいじゃんかよ!」

今日もランドセルを背負った子供達が”心霊スポット”の前で怯えていた。

決して珍しい光景ではなくて、むしろ日常。

子供達が去った後、私は当たり前のように『幽霊屋敷』へと足を踏み入れる。

決して好奇心なんかじゃない。
むしろ私はその手の類が大の苦手だ。

それでも、これが私の毎日の日課。

実はきちんと持ち主がいる、このお屋敷。
それが世界的有名な推理小説家であることを知っている人は、ほとんど居ない。

室内は定期的に掃除され、外見からは想像出来ないほど綺麗に保たれている。

見上げる程の高い天井や、一般家庭の2倍以上は広いであろう廊下。アンティーク調の手擦りが施された階段。

私が一直線に向かったのは、子供達が噂する”窓”がある、2階の奥から2番目の部屋。

6

そこは『彼』お気に入り場所。
正面の壁が、見上げる限り全て書籍で埋まっているその光景は、いつ見ても圧巻。

読書好きの『彼』は、私が全く理解出来ない様な難しい本を四六時中読んでいる。

中でもお気に入りには推理小説だった。

今日も机の上には、開いたそれが置きっぱなし。

「あれ？」

予想に反して、『彼』の姿が無い。

「おかしいなあ…どこ行っちゃったんだろ？」

分厚い窓ガラスで、外の音はほとんど聞こえない。

しん…と静まり返った室内で、自分の声がやけに響く気がした。

もうすぐ夕暮れ。

窓から差し込む陽の光が、斜めに長く窓枠の影をつくる。

まるで違う世界に、一人だけ取り残されたみたい。

胸騒ぎがした。

”『彼』が黙って居なくなるなんて有り得ない”

言い聞かせても、不安は消えない。

「まさか、ね。」

自嘲した笑みを零すと、部屋の隅にある大きな鏡が目に入る。

濃紺のプリーツスカートをふわり、と揺らしながら、軽く一回転してみた。

去年までと違う制服は、何だか少し大人になった気がして。

「新一に見せたかったのになー」

「…うん。」

「可愛いつて言って欲しかった？」

「…うん。」

「ちょっとスカート短過ぎるんじゃないの？」

「……………は？」

いつの間にか『彼』が私の足元で屈んでいる。

あと少し顔を傾けられたら「見られてしまう」位置で。

私は反射的にスカートを押さえながら蹴りかかった。

「ばっ…ばっ！変態っ！！
どこ見てんのよっ？！」

けらけら笑いながら、『彼』はそれをすらりと交わした。

「オメーが此処に入るの見えたから、驚かしてやろうと思ってさ。」

「もう、急に現れるのやめてよね？！心臓に悪いじゃない！」

「別に良いだろ？」それ”はオレの特権なんだから。」

いつだってフワフワしてて掴み所が無い、まるで悪戯っ子の様な笑顔。

言葉では文句を言いながら、”逢えて良かった”と安心しきってる
私がいた。

「どーしたんだよ？んな浮かねー顔して。」

「…居なくなっちゃったかと思った。」

目を丸くした彼は、すぐに優しく微笑んだ。

きつと私が欲しがっている言葉を知っている。

” ずっと傍に居るよ。”

” 離れたりなんかしない。”

分かってる癖に。そんな台詞、彼は絶対に口にしない。

「 ” 約束” しただろ？」

―― ” 約束” …。

頭では理解していても、破られるはずないと信じていても不安は消えない。

こんなに不確かな契^{もの}約が他にあるだろうか。

私の気持ちを他所に、彼は笑顔で続けた。

「で、入学式どうだった？」

「園子と同じクラスになったよ。」

「そっか、良かったな。」

” 貴方も一緒だったらもつと良かったのに。”

浮かんだ言葉を押し込め、俯いた。

言うだけ虚しいのは、自分が一番良く分かってる。
同じ高校の制服を着て、一緒に過ごしたい…その願いは絶対に叶わない。

まるで彼一人だけを残して過ぎていく日常。
私だけ歩き続けている罪悪感に似た感情も、無理矢理振り払って過
ごしてきた。

だけど。

” 彼が高校生だったら、きっと…”

一度も考えなかったと言ったら嘘になる。

「なあ、蘭。もしかしてコレ？」

彼が私の顔を覗き込んでいた。

数秒前との異変。

思わず見とれて、体温が上がってしまった。

「…なによ、その格好。」

「オレの制服姿が見てみたいって顔に書いてあったから。」

「そ、そんな事思ったわけないでしょ?!」

「あ、そ。でも結構似合うだろ?」

”いつの間にか”制服姿の彼は、帝丹高のパンフレットを片手にヒラヒラさせて微笑んだ。

「”それ”も特権って言いたいの?」

「”資料”さえあれば何にだって着替えられるぜ?」

さっきまで部屋着のラフな格好だっただけに、何だかどきどきする。

言葉にしなくても、隠したつもりの心は読まれてしまう。
私が特別分り易過ぎる、と彼は言うけど。

本当は入学式の最中も、男子生徒を見て何度も思った。
彼ならきつと似合いそうだなって。

読まれたのは悔しい。

…けど、やっぱりカッコ良い。

絶対女子生徒の注目の的だと思う。

そしたらヤキモチばっかで疲れそうだな。

なんか複雑。

くだらない妄想ばかりしていたら、ふいに彼と目が合った。

「な、なによ？」

「いや。逢った時はあんなにガキだったのに、早えーなって…
さすがに今までみたいには此処に来られなくなるんじゃないの？」

彼が私の思考を見抜くのが得意のように、私にも特技があった。

不器用な彼から真意を汲み取ること。

強がりで、いつも笑ってて…

絶対に泣かない彼は、本当の気持ちを中々言葉にしない。

「今まで通り毎日来るよ？新一が嫌だって言ってもね。

”約束”したじゃない？」

私達が出逢ったのは、お互いに小さな子供だった頃。

ずっと親友で、幼馴染みで…初恋の人である新一と、いくつかの”約束”を交わした。

幼かった二人にとっては、何より強い絆で。

今でも私達を繋ぐものに変わりはないけど…

私が中学生、高校生と成長していくにつれて、新一が迷い始めたのに気付いてしまった。

そんな事考えて欲しくないのに。

「蘭がそう言うなら来てくれたって…オレは別に、いいけど。」

「うん。」

本当は不安だ。

いつか新一は離れようとするかもしれない。
黙って消えてしまつかもしれない。

”約束”から私を解放する為に。

「…ばか。」

呟きは自分でも聞こえない程に小さくて。

彼を軽く睨んだ。

…きつと今の私は、駄々をこねる子供みたいな表情をしている。

「蘭？」

「……………」

あからさまに”不機嫌です。”と言いたい顔で、無言のまま、彼に

向かって両手を伸ばした。

新一は呆れた顔で、でも少し嬉しそうに微笑んで。

私の腕を引き寄せて、優しく抱きしめてくれる。

男の子の癖に華奢な体。

肌や髪、唇の感触は間違いなく感じるのに。

たったひとつだけ、たりない。

出逢った時からずっと。

―彼の左胸からは、何の音も聞こえない。

私が恋した、この世界で一番好きなひと。

それは私が”この世界で一番嫌いなもの”だった。

—

2（彼の特技）

「なんでもいってよ。わたしがかなえてあげるから。」

子供だったから。

魔法だって使えると信じていたから、無邪気に言葉にした。

一番の願いは叶えてあげられないのに。

残酷だった。

でも、その時彼が口にした願いはとても些細なもので、悲しそうな笑顔で呟いた。

「……そら、をみてみたい。」

「そら？そらなら、どこからでもみえるよ？」

後になって、知った。

彼が見ていたのは、窓枠に仕切られた四角い空だったこと。私達が当たり前に見ている果てのない空を、彼は知らなかった。

― 2（彼の特技）―

「あれ？何かあったのかなあ？」

高校生もすっかり板に付き、少し肌寒くなり始めた季節。
ある日の放課後、私はいつも通り新一の家へ向かっていた。

目についたのは数台のパトカー。
マイクを持ったアナウンサーと、カメラまで居る。

その周りを囲む、大勢の見物人。
辺りは騒然としていた。

一瞬『幽霊屋敷』の方かと不安が過る。

人だかりから背伸びして覗き込むと、どうやら「現場」は隣の家だ。

（事件、かな？こんな身近で起こるなんて…）

これだけ人が多いと彼の家へ入れない。

無人のはずの『幽霊屋敷』に女子高生が出入りしているなんて、変な噂でも立てられたら後々面倒になる。

（仕方ないな。）

表門から大きく迂回すると、人影の無い路地に辿り着く。

騒然としている「向こう側」が嘘みたいに静まり返っていた。

（…誰も見てないし、いいよね。）

裏側まで立派なこの屋敷の柵は、一部だけ老朽化している箇所があった。

子供の頃、よくそこから潜り抜けて中へ入って事を思い出したのだ。

さすがに今は上から乗り越えるしかなくて。

こんな事していると不法侵入してるみたいだ、なんて呆れてしまう。

「あなた、何してるの？」

「…へ？」

最悪なタイミング。

今まさに乗り越えようとした瞬間、背後からスーツ姿の女性が声をかけてきた。

次々と隣家の裏口から刑事らしき人が数人出て来る。

その全員が、不審者を見る様な目で私を見上げていた。

「その家、ちゃんとした持ち主が居るんだから勝手に入っちゃ駄目よ。」

「え?! や、あの…」

速攻で柵から離れ、思わず一步後ずさる。

現役刑事達に囲まれた私は、追い詰められた犯人みたいだった。有り得ない状況が情けなくて溜め息が出る。

「まったく…高校生にもなって幽霊屋敷の探検でもするつもりだったの？」

「ち、違います! えっと…じ、事件に興味があつて! ここに昇れば窓から見えるかなーって…」

「探偵ごっこって訳ね？」

「ま、まあそんな感じです。…ゴメンナサイ。」

痛い所を指摘され、咄嗟に出た口実は完全に嘘っぱい。

「な、何があったんですか？」

「…ちよつとね。」

違う話を振って会話を逸らしてみる。

本当は大して興味も無かったけど、このままじゃ余計な疑いまでかけられそうな気がして…

「佐藤君？何かあったのかね？」

彼等の背後から聞こえた声。

ふいに、その主と目が合う。

目深に被った帽子が印象的な男性刑事。

雰囲気からして、おそらく周りの刑事の上司。

（あれ？この刑事さん何処かで…。）

会った事がある。

不思議な感覚がしてじっと見つめていると、彼も目を見開いた。

「もしかして君…毛利君の娘さんじゃないか？」

「え？」

再び彼の声を聞いて、記憶が晴れた。

昔刑事だった父親の職場で、よく私を可愛がってくれた父の上司。
あれから何年も経っているけど、彼に間違いない。

まさか、こんな風に再会するなんて…

「め、目暮さんですか？」

「やっぱり蘭君か！大きくなったなあ。」

「目暮警部、この子と知り合いなんですか？」

「ああ。元部下の娘さんだね。」

予期せず知人同士だった事で、その場の空気がどこか和んだ。

今は探偵業の父親の話から、昔の思い出話。

そこから会話は何故か、とんでもない方向に向かってしまった。

「貴女が事件に興味があるのも理解出来るわね。」

「ほ、本当にすみません。」

「でも高校生が知るには残酷過ぎるわよ。」

「…この方、もしかして亡くなったんですか？」

「知ってる人？」

「は、はい。小さい頃、よくこの辺りで遊んでましたから。」

その言葉を聞いた佐藤刑事が、目暮さんに目配せした。
頷いた彼は、私に向き直る。

「そうだな…一応彼女に話を聞いてみるのもいいかも知れんな。彼、ほとんど近所付き合いのない人だったみたいだね。情報が少ないんだよ。」

「…はあ。」

「一見自殺で亡くなってるんだが…不可解な点が多いんだ。」

小さな頃から知っている人が、もうこの世に居ない。

考えただけで血の気が引いて、貧血でも起こしそうだった。

元々作り話のオカルト系すら苦手な私に、現実起きた事件の話なんて…到底耐えられそうにない。

そんな思いに気付いて貰えるはずもなく、事件の全容…現場の状況の細部まで容赦なく聞かされた。

一応知っている限りの情報は伝えたものの、何か分かる訳もなく。

「蘭君、悪かったね。彼について、他に何か思い出したら連絡してくれ。」

「は、はい。」

ぐるぐる目が回って倒れそうになる寸前。

目暮警部に連絡先を渡されて、ようやく開放された…

「…ただいまあ。」

「おかえりー。」

さっきまでの緊張感とは真逆の緩い声…

大きなソファァーでゴロゴロ読書している新一を見たら、何だか気が抜けてしまった。

私も力なく、彼の向かいのソファァーに倒れこむ。

「…新一、また本読んでるの？」

「ホームズは何回読んでも飽きねえよ。」

「よくそんな血生臭いミステリーばっか読んでられるわね…」

「何だよ、やけに機嫌悪いな。何かあったのか？」

「…あのね…」

ついさっき目暮警部達から聞いた話を、新一に聞かせてみた。

自分の中だけに留めておくのが辛くて、こういう事に免疫のありそうな彼なら大丈夫だと思って。

でも、話始めてから後悔した。

いくらミステリー好きだからって、本物の…しかも自分の家の隣で人が亡くなったなんて知ったら、さすがに彼だって…

…そんな心配は全く無用だったと気づかされたのは、数分後。

話が進むにつれ新一は、塞ぎこむどころか…もの凄く楽しそうな表情をしていた。

「それで、肝心の不可解な謎ってどこなんだ？」

「新一…何か反応おかしくない？」

「おかしいって何が？」

「その表情^{かお}よ。やけに嬉しそ^うじゃない。」

今の彼は、寝る前に本を読んでもらう子供みたいに嬉しそうで、かなり興味津々で、目がキラキラ輝いてる。

「だってすげー楽しいもん。」

…ちょっと可愛い。

とすら思ってしまった私も、相当末期かもしれない。

「それって自殺じゃねえよ。」

「へ？」

「すぐその刑事に電話した方がいいと思うぜ？犯人に証拠消される前にな。」

「は、犯人って…」

「他殺ってこと。ま、可能性だけだな。」

普通なら考えられない視点。

新一はそれを持っていて、彼の推理を聞けば聞くほど納得がいく。見ていないはずの現場の光景が、鮮明に浮かんでくるみたいに。

…関係者でもない素人の推理なんて、警察に話していいんだろうか。知り合いとはいえ、相手は現役の刑事。

聞く耳を持つてくれるか疑問だし、間違っていたら凄く迷惑をかけてしまう。

怖いけど…もし新一の推理通りなのだとしたら…？

携帯を手にしても中々電話出来ずにいると、新一は私の隣に座って笑った。

「心配すんなって。ひとつの可能性として伝えてみるよ。」

「…うん。」

「本当は現場を直に見られたら確信出来るんだけどさ。オレは家^こから出られねえし、蘭も見たくないだろ？まあ、後は警察に任せればいいんだから。」

私は頷き、決意して電話をかけた。

隣で話す新一の推理を、私の言葉で目暮警部に伝える。

試しに聞いてやるか、程度の雰囲気だった彼も、的を得ている数々の推理に興味を持ち始めた。

「すぐに再捜査する。協力感謝するよ。」

最後はお礼を告げられ、通話を終えた。

「…これで良かったんだよね？」

「いいんだよ。結構楽しかったし。」

「や、そういう意味じゃなくて…まあいいけどね。」

「え？」

「でも新一、凄いよ。ただの推理小説オタクじゃなかったのね？」

「…それ褒めてんのかよ？まあ、これくらいなら蘭でも解けるんじゃないーの？」

「…無理に決まってるでしょ…ばか。」

—この数日後。

本当に「犯人」が捕まり、しかも新一の推理は寸分狂わず的中。

私は断つたのに、警察から捜査協力の感謝状なんてものを渡されてしまった。

…しかも。

「な、なによこれー?!」

「うわー、すげえなー。」

ある日の新聞に、信じられない記事が載っていた。

「女子高生、見事難解事件の真相を見抜く！推理力は現役探偵の父親譲り。だって。」

「嘘でしょ…私何もしてないのに?!」

「いいじゃねーか。素直に喜べば。」

「あのねえ…解いたのは新一でしょ?!」

「どっちでもいいだろ、そんなの。」

頭を抱える私を見て、新一は心底楽しそうだった。

こんなに楽しそうな彼を見るのは、テレビでサッカーのワールドカップを観戦していた時以来…

かもしれない。

「これから蘭宛に依頼が来ればいいのに…」

「絶対嫌。ていうか無理!」

「その時はオレが推理してやるからさ。」

「勝手なこと言わないでよ!」

「あー本当に来ねえかなー、依頼。」

完全な不本意で女子高生探偵が誕生した瞬間だった…

3（西の高校生探偵）

「…ねえ、らん。さつきから、だれとはなしてるの？」

親友の言葉を聞いた時、何となく予想していた事が確信に変わった。

でも私は、新一を怖いだなんて微塵も思わなかった。

目の前に居るはずの彼を、私以外は認識出来ないなら。

彼は私にとって特別な存在なんだって。

―ああ、やっぱりそうだったんだ。それなら、私は。

ずっと彼の傍に居よう。

一人になんかせせない。

そう決意して、他の誰にも気づかれない様に彼に笑ってみせた。

あの時…きっと本当は泣き出したかった彼の、不器用な笑顔が忘れられない。

「…もしもし。」

『蘭君、授業中なのにすまないね。ちょっと事件の事で相談なんだが…』

「大丈夫です。」

数学の授業中に鳴り出した着信。

咄嗟に理由をつけて教室を抜け出した私は、今屋上に居る。

あの事件をきっかけに、こうして目暮警部から事件について”相談”を受ける日々が始まった。

無視する訳にも放置する訳にもいかず、その度仕方なく新一に相談しながら解決していた。

こんなこと正直に「無理です」と辞めてしまえばいいのに、推理している時の新一の嬉しそうな笑顔を思い出したら、今回も彼に話してしまう自分がいる。

(本当ダメだなあ…私って。)

フェンスに寄りかかって、青い空を見上げる。

晴れ渡った空には雲ひとつ浮かんでいなかった。

空、^{そら}か…

「……………」

『蘭君？』

「あ、すみません。少しだけ、考える時間を貰ってもいいですか？」

『ああ、もちろんだよ。』

「それと、現場の写真を送っていただけると助かります。いつも通りパソコンの方に。」

『わかった。宜しく頼むよ。』

通話を終わると、走って教室へと戻る。

ドアを開いて担任と目が合つと、怒られるどころか…

「事件なのね？遠慮せず行ってきなさい！貴女は我が校誇る高校生探偵なんだから！」

「へ？」

「蘭、頑張つてね！後でノートのコピーあげるから安心して！」

「園子。あ、ありがと。」

こんな事で本当にいいんだろうか？

そんな疑問はさておき、急いで机から鞆を持ち出す。

クラス中の歓声に背中を押され、私は教室を後にした…

「あ、新一？また目暮警部から頼まれたんだけど…今からそっち向かうね。」

『分かった♪今回はどんな事件なんだ？』

（相変わらず嬉しそうだな…）

靴を履き替えながら、携帯で事件の内容を新一に教える。

現場写真は工藤家のパソコンに送って貰うようにしているので、内容さえ伝えてしまえば、後は彼が勝手に解決してしまうのだ。

私は彼の推理を横で聞きながら、目暮警部に話すだけ。

（事件現場の写真なんて絶対見たくないもん…）

見てしまったらたぶん、貧血どころじゃ済まない自信がある。
数日間は確実に寝込んで悪夢を見続けそうだし…

（新一って何で平気なんだろう？男の子ってそんなもん？）

そんな事を考えながら校門に近づいた時、見慣れない制服を着た一人の男の子が目に入る。

色黒の肌に黒髪。見た事のない顔。

「あんたか？毛利蘭って。」

「…へ？」

予想外に声をかけられ…いや、むしろ名前を呼ばれて思わず立ち止まってしまった。

「あの…どこかでお会いした事ありましたっけ？」

「やっぱりそうか…ふーん、何や普通の女子高生やな。」

（か、関西弁？てか誰？）

間違いなく初対面のはず。

なのに全く遠慮する事無くジロジロ見てくる彼に少し不信感を覚えた。

思わず一歩後ずさった私を見て、彼はニヤリと笑う。

「あんた最近、東京（こうち）で有名な女子高生探偵やる。どんな奴か一目見たる思うてな。」

「は?!何それ?!」

「でも全然探偵には見えんわ…」

…それってまさか関西にまで噂が拡大してるってこと?
事件解決してるのは、本当は新一なのに?
そんな大事になっているなんて完全に予想外だった。

頭、痛い…

「あ、まだゆうてへんかったな。オレは服部平次。あんたと同じ高校生探偵や!」

「高校生探偵?」

「ああ。あんた、この時間に学校出てくるっちゅう事は…事件か?そんなら…」

(い、嫌な予感がする…)

どうする?この感じ、きっとこのままじゃ何か面倒な事になる気が

する。

もし「一緒に現場に行く」とか言われてしまったら？

もちろん事件現場を直視しなきゃいけないのも嫌だけど、目の前に居る本物の「探偵」をやり過ぎるのは、並大抵なことじゃない。

「誰かに相談してる」と見抜かれたところで、新一の事は説明しようがないし。

彼の視線には隙が無い。

現にこの数分のやりとりだけで、私の事を疑っているのがよく分かる。

『蘭？何かあったのか？』

(……………あ！)

手にした携帯を見て思い出した。

急に話かけられたせいで忘れていたけど、新一との通話はまだ切れていなかったのだ。

…いけるかもしれない。

「ご、ごめん新一！すぐ行くから！また後で電話するね！」

「？シンイチ…？」

「あの、別に事件とかじゃないの。聞いての通り、ちょっと知り合いが急用で早退するだけで…」

「…………ほー。知り合い、か。」

通話時間が表示された携帯画面を見せ、本当に電話してた、とアピールしてみた。

…でも。この目はめちゃくちゃ疑ってる…

一歩ずつ詰め寄られて、ついに背中に校門の柵が当たった。
もう逃げ場が無い。

「なあ。今までの事件、ほんまにあんたが…」

「へーじいー！…！」

「「え？」「」

突然聞こえた大声に、私と彼は同時に振り向いた。
数十メートル先からセーラー服の女の子が走って来るのが見える。

「げー！和葉！！！」

（今度は誰よ…）

息を切らして辿り着いた彼女は、呼吸を整える事も無く彼を睨みつけた。

「平次！あんた何処行つてたん？！めっちゃ探したやん！！」

「い、いやー道迷うて…」

「嘘！！東京見物やけに楽しみにしてる思つたら…この子に会いに来たんやろ！！」

いつの間に東京で女作つてんの？！」

「はあ？」

「最低！！平次のアホ！！」

あまりの勢いに、私は為す術なく見物しているしかなかった。

さっきまでの緊張感は何処へやら、彼は思いつきり彼女に圧倒されている。

彼女は今度は私を睨みつけた。

「ふーん…結構可愛いやないの。ふーん…」

明らかに敵対心剥き出しの視線。
彼から開放されたと思ったら、今度は彼女に捕まってしまった。
怒りの矛先が私に向いたのをいいことに、彼は少しづつ彼女の背後へ移動している。

「そや…オレ、寄るところあんねん。…集合時間には戻るわ!」

「え?!」

(…に、逃げた…)

言いながら、すでに全力疾走していた彼の姿はすぐに見えなくなる。
結局訳が分からないまま見知らぬ女の子と2人取り残されてしまった。

何となく気まずい空気が流れる…

「…で?いつから平次と付きおうてんのん?」

「え?いや、何か勘違いしてませんか?」

「何を?あんた、平次の女なんやろ?」

「ち、違います。彼とは今初めて会ったばかりで…」

「…とぼけたかてあかんで。」

一通り説明しても、彼女の疑いは晴れない。
女の子って疑い深いからな…
どうしたら信じてくれるだろう。

その方法は悩むまでもなく、ひとつしかない。

「あのね…わたし、好きな人居るから。服部くんとは何もないよ？」

「…好きな人？」

「うん。これからその人に会いに行くところだったの。」

「…そうなん？」

呟くと彼女は、あどけない微笑みを浮かべた。
さっきまでの表情が嘘みたいに、笑うと可愛い。

どうやら修学旅行で東京見物に来ている大阪の学生さんで、今は自由時間。

さっきの彼は「西の高校生探偵」と呼ばれるくらいの有名人で、彼女は彼の幼馴染…という事だ。

（なんとか疑いは晴れたみたいだけど…）

それにしても。

「平次は何処行ったんやろ？」

（…何かまた嫌な予感がある…）

—

4（きみの瞳）

「なあ、その人って蘭ちゃんの彼氏？」

「か、彼氏？…うーん、そっか。彼氏…になるのかな。」

「ええなあ！羨ましいわ。」

「和葉ちゃんこそ、服部君と付き合ってるんじゃないの？」

「ちゃうよ。平次にとってアタシはただの幼馴染や…」

そう言っただけで、寂しそうに笑う彼女。
でも私は、そんな彼女こそ羨ましい。

だって想いが通じさえすれば、彼に見せたいものを見せてあげられる。

夜空いっぱい流れ星。
水平線が朱く染まる海。
青く輝く一面の雪。

そんなに多くは望まないから。

せめて死ぬまで、彼と同じ景色を見ていたいのに。

― 4（きみの瞳） ―

「結構遅くなっちゃったなあ……」

和葉ちゃんと別れた後、とぼとぼ一人で考え事をしながら歩いていた。

高校生探偵であるという「服部平次」。

彼の鋭い視線を思い出すと、何もかも見抜かれているようで……

仮に誰かに本当は私の推理ではない事が分かって、新一の事を突き止められたとしたって、彼の存在が世間に広まる事はないけど。それでも極力、面倒になりそうな事態は避けておきたかった。

新一が「自分は蘭以外に認識されない」という彼自身の存在をどう思っているかは分からない。

だけど、出来るだけそっとしておいてあげたい。

傷つく様な嫌な出来事があったって、彼はきつと顔に出さないから。

もっと頼ってくれたらいいのに。

彼の性格は分かっているけど、やっぱり寂しい。

いつも私が甘えてばかりで、彼が私に頼ったり甘えたりすることは少なかった。

そんな記憶はほとんど無いに等しい。

（私じゃ頼りないのかな…）

考える程、気分は沈む。

空はこんなに晴れ渡っているのに、私は下を向いて歩いている。

いつもの立派な扉が余計に重く感じた。

「新一、遅くなってごめんね。」

「あ、蘭おかえり。」

リビングに着いた私は、そこに居た人物の姿を見て持っていた鞆を思わず落とした。

「……………え。」

「よー姉ちゃん。邪魔してんで！」

全く意味が分からない。

ごく自然にソファ―に腰掛け、笑顔で右手を軽く上げたのは間違いなく彼。

「服部平次」。

（どうして彼が此処に?! てか、新一のこと見えてる?!）

親友の園子や新一の両親でさえ彼の姿は見えなかったのに？ 今日突然現れた彼には見えている??

「しっかし今回の事件は単純過ぎてつまらんかったわ。そや! こないだオレが遭遇した事件、めっちゃおもしろくてな…」

「へー。そりや確かに面白そうだな。そーいやオレもこの前…」

「おー何やワクワクしてきよったで〜! やっぱオレとお前はどっか似てんのやな〜」

（しかもすでに仲良さそうにしてるし!）

私は開いた口が塞がらず、しばらく突っ立ったままだった。それに気づいた新一と目が合って、やっと我に返る。

思わず彼の腕を引っ張って廊下へ連れ出した。

「し、新一！何で彼が此処に居るの？」

「ああ…さっき、玄関の呼び鈴を連続で鳴らしまくられて。

あまりにうるせーから思わずドア開けたら、何故か普通に話しかけてきたんだよ、あいつ。」

「それでいつの間にか意気投合しちゃったの？…てか変な事聞かれなかった？」

「や、特には。雰囲気からしてオレの事は何も気づいてないと思うけど…」

「…どうしたの？」

「何かあいつ、初めて会った気がしねーんだよな。初対面のはずなのに。」

…過去に何処かで彼と会った事があるっていうこと？

今まで新一から彼の話を聞いた覚えは一度も無い。

彼が新一を認識出来るのには、他の人とは違う何かがあるんだろうか。

二人して今の状況を理解出来ずに居ると、困惑の元凶である張本人が顔を出した。

「なあ。その目暮っちゅう刑事に早いとこ電話した方がええんちゃうか？」

「へ?!」

「隠さんでもええ。姉ちゃんがほんまの探偵じゃないんは最初見た時から分かってもうたわ。」

「そ、そう…だよね。やっぱり…」

若干失礼な事を言われてる気もするけど仕方ない。

間違いない事実で、いつ誰かに知られてしまってもおかしくない状況だったのだ。

それよりも気がかりなのは。

「あの、新一が代わりに推理してるって事は…誰にも、言わないでくれる?」

「心配すんなや。オレは別にそこには興味無いねん。あんたらにはあんたらの事情があるんやろ?」

「じゃあオメー此処に何しに来たんだよ?」

「オレと同じ『本物の』探偵をこの目で見ておきたかったんや。それに此処は昔…」

言いかけて、彼は言葉を濁した。

—。

一瞬の沈黙の後、携帯の着信音が鳴り響く。
着信相手を確認した彼は、明らかに不機嫌そうな顔をした。

「…まあた和葉や。何やねんアイツ。しつこいやっちなあ。」

「そついえば修学旅行中なんじゃなかったの？時間大丈夫？」

「時間？そんならまだ余裕が…」

「あ。そついや時計動いてねえよ。」

「…なんやと？」

「だから、あの時計動いてねえんだつて。」

「…………。」

「…服部くん…電話、出た方がいいんじゃない？」

「あ、ああ…そうみたいやな…」

案の定、通話ボタンを押した直後から響き渡る和葉ちゃんの怒鳴り声。

すでに集合時間を過ぎていたらしい彼は、携帯を30センチ以上耳

元から離れた状態で、面倒臭そうな顔をしながら怒られ続けている。

『ええ加減にせえや！！どアホー！！！！！！』

その言葉を最後に乱暴に切られる通話。

私と新一は黙って見守るしかなかった…。

「気をつけてね。駅までの道、分かる？」

「大丈夫や。東京初めてやないからな。」

「あ、ねえそっいえば…どうして新一の家を知ってたの？」

「え？…あ、ああ…来る前に姉ちゃんの事、少し調べてな。まー細かいことにすんなや。」

（細かい事って言われてもなあ…）

「ほな、また来るわ！」

今日一日ですっかり馴染んでしまった彼は、笑顔で玄関を出て行く。
新一はずっと考え事をしているみたいだった。

彼の姿が見えなくなった後も、しばらく黙ったまま。

「新一？どうかしたの？」

「…いや。何でもねえ。」

目暮警部への連絡を済ませた頃には、陽が傾いていた。
新一は、ぼーっと窓の外を眺めている。

（いつもなら推理した後、凄く楽しそうなのに…服部くんの事、気
になってるのかな？）

私は新一の隣に座って、彼と同じ景色を見てみた。

大きな窓。

でも、ここから見える空は……

「蘭…あのさ。」

「…ん？」

「前に何かの本で読んだ事あるんだけど。人間の瞳って、すげーよく出来てるんだって。」

黙って彼の声に耳を傾ける。

新一の肩に頭を乗せ、沈んでいく夕日を眺めた。

「絵とか写真とか、綺麗な景色ってよく見るけど…どうしても実際に見る景色には劣るんだって。」

「やっぱ、切り取られたものって勝てねーんだ。」

人間の瞳は、右左もどっちを見渡しても、視野いっぱい広がる景色を一番綺麗に認識するって。」

「……………」

「…ここから見える景色は、いつも切り取られた作り物みてーって思う…何か笑えるよな。」

「オレはこの景色以外知らなくて…今見えてる空だってこんなに綺麗、なはずなのに。」

新一はいつも通り笑ってる。その表情に曇りは無いのに。

言葉は、悲し過ぎる。

だから彼を抱きしめた。

こうして傍に居たら、全て私が代われたらいいのに。

「…新一。泣いたっていいよ？ 見えないし。」

「…泣かねーよ。」

本当は、泣きたいのは私の方。

彼もそれを知っていて、でも心地良さそうに私の腕の中で目を閉じた。

私は新一に無限の空を見せてあげられない。

けどずっと一緒に居るから。

新一の瞳に映る景色がいつも綺麗で在る様に、笑っていられるように。

…傍に居る、から。

「…本当は知ってる気がする。オレがこうなる前に見た、どっかの空…。」

「…え？」

「あいつ…服部の事も。」

—

5（あいのこじば）

「…なに？」

キスの途中に聞こえた、少し不機嫌そうな彼の声。

私が彼の口元に指を当て、それを止めたから。

…分かっているのに。

今日もまた言葉にする。

「…好き？」

「…んなの言わなきゃ分かんねえの？」

この質問には、いつも明確な答えは返ってこない。
すぐに指は解かれて、曖昧にされてしまう。

”すき”の二文字。

女の子が一番欲しがる言葉。

彼から聞いたことは一度も無かった。

―5（あいのことば）―

（あーあ…昨日も聞けなかった。）

本来学生なら集中すべき授業中、私は全く関係ない事を考えていた。

数日前に偶然出会った大阪の女子高生。

彼女の質問に答えてから、今まで考えない様にしていた不安が過り始めていたのだ。

私の好きな人。

その人は彼氏？と聞かれて、一応肯定したけど…

（彼氏…なんだよね？や、でも…）

一般的には恋人になるのって、想いを伝えてそうなる訳で…

どっちかが伝えたら、もう一人が返事して。

両想いって確認したら晴れて恋人。とかそんな感じだと思う。

記憶を辿ると彼から聞いた覚えの無いその二文字。

私はもちろん伝えてる。

だって本当に彼が大好きで仕方ないから。

でも、いつも彼の返事って…聞けてないような。

(…あれ？もうこんな時間だったんだ…)

終業のチャイムが鳴り響き、一気に現実に引き戻される。

心のモヤモヤが晴れないまま、溜め息をつきながら教科書を閉じた。

「蘭ってさ。本当は彼氏居るでしょ？」

隣の席から突然放たれた言葉。

「え?!?!」

あまりに急で、多少声が裏返ってしまう。
彼女はそれを見逃さなかった。

「あーやつぱり！？だって最近ずっと切なそうに溜め息ついちゃってさ…やつぱ恋の悩みだったのね?!」

「ち、違つよ園子!」

「ねえ…どこの誰なわけ?!教えてよ!親友でしょ?!」

「だから居ないってば…」

…私の言葉は彼女の耳を素通りしているらしい。

小さい頃から親友である園子には、一度だけ新一について話したことがある。

話した…と言っても核心に触れた訳じゃなくて「新しい友達が出来たから紹介する」と彼の家に連れて行つたのだ。

あの時の事は今でもよく覚えてる。

”…ねえ、らん。さつきから、だれとはなしてるの?”

始めは冗談かと思つたけど、彼女の顔を見て悟つた。

園子には本当に新一の姿も見えてないし、声も聞こえていない。

だからそれ以上、何も話せなかった。

一番の親友である彼女に隠し事するのは辛かったけど、心配かけたくなくて。

「せめてさ、告白の言葉だけでも教えてよ。今、ちょっといいかな
ゝって人がいるんだけど、ここはストレートに好きです！がいいと
思う？」

「う、告白？」

そくだ…やっぱり普通、恋人同士には『告白』が存在する。
片思いからの発展。勇気出して呼び出したり、電話やメールで伝え
たり…

でも………

「…言われたことないな。そんなこと。」

「…え？好き！とか愛してるゝとか、何かしらあったでしょ？さす
がに。」

「ないよ。変…なのかな？」

「ちよつと？！それ、遊ばれてんじゃないの？！」

大声で机を豪快に叩いた園子に、クラス中の視線が集まった。
会話が会話なだけに、心なしか白い目で見られてる気がする。

園子は軽く咳払いすると、私に耳打ちした。

「蘭、まさか…その男によからぬ事まで許してるんじゃないでしょうね？」

「な、ななな…なにそれ？」

「決まってるでしょ！わざわざ言わせる気？」

「うう……………」

「…まさか凶星？」

「や…でも、言葉で言われなくても好きでいてくれてる感じはするけど…」

それにやっぱり私が好きだから、何て言うか…」

「つまり流されちゃってるってこと？」

「…うん。ダメ…かなあ。」

「ダメダメ！！絶対駄目よそんなの！！男なんて表面だけじゃ分からないのよ?!」

「そ、そうかなあ…」

「そうよ！！本当に大丈夫なわけ？その人…」

大丈夫？と聞かれても答えようがなかった。

（この前の服部くんはとりあえず別として。）

新一は私以外には認識出来ない。

つまり他の女の人と関わりようが無いんだし、さすがに遊ばれてるなんて事は…

って…でも待つて。

もし、その逆だったら？

私しか居ないんだから、仕方なく…とか…。

だから言わないんだとしたら合点がいく。

でも、それは最悪の結末。

もし本当にそうで、問い詰めることで彼が認めたらどうするの？

「…どうしよう。やっぱり聞いた方がいいのかな？」

「いいに決まってるでしょ？はつきり聞いてきな！」私の事どう思ってるの”ってね。」

「…う、うん。でも…」

この場で決意しても、新一の顔を見たらきつと気持ちは揺いでしま
う気がした。

私は彼の事が好き過ぎて、いつもどこか少し緊張してて。

もう出逢って10年くらい経つのに…気持ちは冷めるどころか、時
が経つほど大きくなる。

彼が目の前に居ると胸が苦しくなるし、触れた指は震える。

一緒の学校に通ったり休日どこかへ出掛けたり…『普通のこと』は出来ないけど、傍に居られたら充分だった。

新一が隣に居て、くだらない事を話して笑って…それ以外何も望まないくらいに、彼が好きで。

もう『好き』なんて簡単な言葉じゃ表現し切れないのかもしれない。

彼に本当の気持ちを聞くのは怖い。

けど、もし新一が”好き”って言ってくれたら…

私はきつともう、新一から離れられない。

今でもそうだけど、今以上に。

「でも、何？」

「…聞けるか不安なの。」

「しょうがないわね。じゃあこの園子様が直々に…」

「や、聞いてくる！私、頑張るから！」

「何よ、そんなに会わせたくない人なの？」

「…そのうち、ちゃんと話すから。ごめんね…でも、ありがと。園子。」

そんな会話の後、今私は新一の家の前に立っていた。
一度気になり出すと全てが上の空で、部活は休んでしまった。

今日は何だか、この洋館に圧迫されている錯覚さえる。
それくらいに緊張するけど、扉を開けばもうやるしかない。

「あれ、蘭？今日早いな。部活は？」

「き…今日は休みだったの！」

彼はいつもの部屋で読書していた。

立派な机の上には分厚い本。

頬杖をつきながら笑顔をみせた彼は、いつもと何も変わらない。

違うのは私自身だ。

変に意識しているせいで声が上がってしまいそうだった。

時間が経ったらまた迷ってしまう…だから、今すぐ。
聞くしかない。

「し、新一…!」

「な、なんだよ？」

詰め寄る私に圧倒された彼は、座っていた椅子から落ちそうになった。

「あの…どうしても聞きたい事があるんだけど…」

「…聞きたい、こと？」

言いながら体温が上がっていくのが自分で分かる。
目を逸らしたくなるけど、真っ直ぐ見つめて聞かないと意味が無い。

「し、新一って…その、……………」

「え？何？」

「だ、だから…えつと…」

「蘭？聞こえねえよ…」

「わ、私って、新一にとって”彼女”なの？」

精一杯振り絞った言葉は、本来発するはずだったものと少し違った。彼は完全に『？』を浮かべた困惑の表情。でもすぐに笑顔になった。

「んな事気にしてたのかよ？何言つかと思ったら…」

「…ごめん。」

「あー、でも確かにあんまり考えた事なかったな…そういうの。」

「そう、だよな？」

…やっぱり。
今のは答えになってない。

もしかして、意図的に話逸らしてない…？

考えていた最悪の事態がまた頭を過って、途端に弱気になってしま
う。

”…こんな思いしてまで、聞かなくちゃいけないもの？”

今のままでも充分幸せなのに。
でも、私も…ちゃんと知りたい。

「新一は…」

彼の瞳が微妙に揺らいだ。きっと彼は私の言葉を予測している。

照れて言えない、とかならないよ。無理に聞かないから。

だけど彼の場合はどこが違う。

本当に言いたくなさそうに感じる。

「私のこと、本当に好き…？」

呟いた声は、諦めかけたように震えていた。

6（雨の記憶）

「私のこと、本当に好き…？」

今にも泣き出しそうに震えた声。

蘭の気持ちを知っていて、それでも絶対に言わなかった。

別に照れ隠しじゃない。オレ自身が言葉にしないと決めていた。

嫌いだなんて嘘でも言えないから。

問われる度に曖昧にして、誤魔化し続けてきた。

こうなる事を予測して、ずっと待ってたんだ。

たった一つの方法だと信じて。

— 6（雨の記憶） —

いつから此処に居たのかは分からない。

目を開くと、一番最初に高い天井が見えた。

それまで何をしていたのかは全く覚えていなくて、思い出せるのは自分の名前と、此処がそれまで住んできた家だという事だけ。

起き上がって辺りを見回しても、誰も居ない。

広い廊下は静まり返っている。

仕方なくリビングのソファーに座って、窓の外を眺めた。

天気は大雨。

おそらく昼間なのに薄暗い空は、時折雷が鳴り響いている。

眺めながら、何となく自分の身体に違和感を感じていた。

起きたばかりなのに睡眠をとった感覚が全く無くて。どこか、何かが物足りない。

それが何なのかは理解出来なかったけど。

「急に降って来ちゃったわね。雨宿りしていつて？後でお母さんの所に送ってあげるから。」

「…うん。」

突然、玄関の方から話し声が聞こえた。

大人の女性と、小さな子供の声。

（…かあさん、かな。）

ソファーから降りて玄関へ向かうと、濡れた傘をたたんでいる母親の姿が見えた。

その傍らに、見た事のない同じ歳くらいの女の子。彼女の方は全身ずぶ濡れだった。

「すぐに拭くもの持ってくるからね。」

「ねえ、かあさん…その子、だれ？」

「此处でちょっと待っててね！」

確かに問いかけたはずなのに、見向きもせずに素通りされてしまった。

廊下の奥へと消えた背中では、結局一度も振り返らない。

（聞こえなかったのかな？）

気にも留めずに、黙ったまま突っ立っている女の子に視線を移した。今にも泣き出しそうな彼女は、寒さのせいか小さく震えている。

「傘、持ってなかったのか？」

「いきなりふってきたから…」

「蘭ちゃん！お待たせー！」

タオルを持って走り寄って来た母さんは、彼女の頭からそれを被せ、くしゃくしゃと拭いてやった。

まるで自分の子供に接している様に、優しい目をしながら。

「寒いでしょ？温かいミルク入れてあげるからね。」

その間何度か母さんに話しかけても、やっぱり返事は返らない。視線すら合う事も無かった。

（なんか悪いことでもしたっけ…）

悪戯したとか、言いつけを聞かなかったとか？それで怒って無視しているのかもしれない。

でも、オレには何も思い出せなかった。

ソファアーに戻って考えていると、前に座った女の子の前にはだけホットミルクとクッキーが置かれた。

オレに原因があって怒っていたとしても、ここまで差別するなんて

呆れる。

隣に居る母さんは相変わらずオレの方を見ない。
いい加減話しかけるのも馬鹿らしくて、オレももう何も言わなかった。

しばらくすると、それまでじっとオレ達を見ていた「蘭」がぼつりと呟いた。

「ねえ…どうして怒ってるの？」

「…え？やーね蘭ちゃん。私、怒ってなんかないわよ？」

「でも。無視されてかわいそう…」

彼女がオレを指差すと、やっと母さんと目が合った…

気が、した。

…変だ。

確かにこっちを見てるのに、どこか視線が合わない。

まるでオレを突き抜けて、向こう側を見ている様に。

「…蘭、ちゃん？誰が可哀想なの？」

母さんの声は微かに震えていて、でも笑顔を崩さずに問いかけた。蘭の答えに、何かを求めているように。

「わたしと同じくらいの、おとこの子。」

「…蘭ちゃんには、その子が見えるの？」

「うん。おかあさんにずっと話しかけてたよ？」

母さんはじっと、オレの方を愛おしそうに見つめている。

「…その子の名前、聞けるかな？」

「…んつとね…しんいち、だって。」

瞬間、母さんはその場に泣き崩れた。

初めて見たその姿にも動揺したけど、それよりも訳が分からない。とにかく、泣いている原因が自分なら「泣く必要なんて無い」と伝えればいい。

そう思って、手を伸ばした。

だけど。

母さんの肩に触れたはずの右手は………空を切った。

(…なん、だ？いまの…)

一瞬で血の気が引いた。

よく分からない、分からないけど…何度やっても結果は同じだった。

何かが今までと違う。でも、何が？

頭に浮かんだのは父親だった。

世界的有名な推理小説家。様々な事件に詳しい彼に聞けば、何か分かるかもしれない。

すぐに受話器をとり、父さんの携帯に電話をかけた。
手が震える。自分の体じゃないみたいに。

何が起きているのか早く知りたかった。

『…はい、工藤です。』

「とうさん?! 大変なんだ... おれ...」

『...もしもし?』

「きこえる?! おれだよ、新一!」

『...? おかしいな... もしもし?』

「とうさんまで... きこえ... ないの?」

乱暴に受話器を置くと、玄関を開けて傘もささずに飛び出した。

誰でもいいから。

早く誰かに冗談だって言っただけで欲しくて。

父さんと母さんが、二人揃って驚かせようとしてもしてんるんだ。
誰か他の人に会えば、きっと否定してくれる。

...そう、思ったのに。

「うそ、だろ...?」

本当なら今頃ずぶ濡れで、水溜まりも気にせず走り抜けてるはずだ。
だけど目の前に広がる光景は、さっきまで居た家の中だった。

「…どうなってんだよ?!」

何度扉を開いても、どうしても… 外に出られない。

どれだけ繰り返しても結果は同じで。

募る苛立ちと不安で、頭が変になりそうだった。

「ねえ。だいじょうぶ…?」

「……………」

…そうだ。彼女は確かに。

「なあ…おれのこと、みえてる…?」

「え? うん。みえてるよ?」

「声も、きこえるんだよな…?」

「きこえるよ。」

蘭に、手を差し伸べた。

彼女は何も理解していなかったけど、黙ってその手を取り、握った。

やっぱり。蘭にはちゃんと接する事が出来る。
でも彼女は、普通に母さんと会話が出来る。

…つまり、おかしいのはオレだけだ。

あれから何日経ったんだろう。

どれだけ経っても到底受け入れられるはずが無い「事実」。

左胸に手を当てても何の鼓動も感じない。
自分の姿は鏡に映らない。

『眠る』『食べる』など、日常の行為も必要無くなった。

さっき来た蘭の友達にもオレの姿はやっぱり見えなくて。

つまりオレは、両親以外の人間にも認識されない存在。
それが今日はつきりと証明された。

だけど、蘭があまりに普通に接してくれるから余計に信じられなく

て。

彼女と居る時だけは、自分が普通じゃない事を忘れていられたから。

「ねえ…しんいち？」

友達の事で気を悪くしていないか、と問いたそうな顔。

無理して笑顔を見せる彼女は、何故か自分の事の様に辛そうだった。

「気にすんなよ。そうだろうなって思ってたから。」

「…わたししか、一緒にあそべないんだね…ごめんね。」

「しか、じゃねえよ。」

「え？」

「蘭がいてくれて…よかった。」

蘭が居なかったら。

オレは完全に一人で、この世界に取り残されていた。

想像するだけで怖かった。

誰にも認めてもらえなくて、話す相手も居なくて。

これから何をしたらいいのかも分からなくて、ただずっと一人で「存在」だけはしてなきゃいけないなんて。

理由は分からないけど、世界でただ一人だけ自分を見ていてくれる
蘭。

オレにとっては、これ以上無い救いだっただ。

(…でも、これからどうすればいいんだよ…)

蘭の話で事情を知った両親は「蘭さえ良ければいつでも遊びに来て
欲しい」と彼女に鍵を預けた。

二人は父さんの仕事で留守が続いている。

蘭は毎日遊びに来るけど…このままいつまでもずっと、彼女を引き
留めている訳にもいかない。

これからの事は、自分で何とかするしかない。

それが、例え死ぬほど辛くても。

一人なんてすぐ慣れる。

そう自分に言い聞かせた。

「あのさ…もう、大丈夫だから。」

「え？」

「もう、ここへは来るなよ。普通のともだちと遊んだほうがいいだ
ろ。」

「…しんいち？」

本当は誰かに傍に居て欲しい。だけど弱い自分は誰にも見られたくなかった。

物心ついた時から両親は多忙で、幼いながらに「良い子で居なきゃ駄目だ」と思い込んだ。

もっとしっかりして、我儕言ったり絶対しないって。

何があっても絶対、人前では泣かない。

それは自分で決めたルールだから。

でも蘭は帰ろうとはしなかった。

「…だめ、だよ。」

「なにがだめなんだよ？」

「わたし…決めたから。」

彼女は笑った。

何の迷いもない笑顔で。

「しんいち。約束、しょ？」

「…やく…そく…？」

「うん。あのね…」

言いながら、彼女は左手の小指を差し出した。

あの日から、ずっと。

オレにとって蘭の存在がどれだけ大きいかなんて、表現出来ない。

絶対大切にするって思ったんだ。

それが出来るって、まだどこかで信じてたから。

蘭と交わした約束が、彼女を繋ぐ枷になるなんて思っていなかった。

7（ふたりの約束）

人の『ころ』は変だ。

いくら強く想っても、願っても。必ず薄れて忘れてしまう。
人の頭の中には最初からそういう機能がついてるから、どんなに逆らったって無理なんだ。

身体が離れている限り永遠には一緒に居られない。
だけど人は皆、それでも何とか誰かと結ばれたいと願ってる。

” 約束、しょ？ ”

彼女の提案、それは。
無理矢理『ころ』を繋ぐ為の手段だった。

―― 7（ふたりの約束）――

「わたしは、これからも毎日ここへ遊びにくる。」

「……………」

「”しんいちを一人にしない”…これが、わたしの約束。」

「…なんだよ、それ？後でいやになってもしらねえよ。」

「ならないもん。」

「…だけど…」

「もう決めたの。だから、しんいちもなにか、わたしに約束して？」

今思えばそれは、約束と言う名の”誓い”だ。
どうして突然言い出したのかは分からないけど、彼女の笑顔は揺るがなかった。

何かを決意したような真っ直ぐな眼差し。

不安定な自分には、たったひとつの道標に思えた。

自分自身にかける誓いなら。

オレは蘭に何を約束できる？

今の自分には何も残っていない。

…それならせめて、ずっと此処へ来てくれると誓った彼女の為に。

「じゃあ…」勝手に蘭のまえからいなくならない”って約束するよ。」

「え？」

「自分がどうなるかなんてわからないけど…もし、消える時がきたら。その前に必ず蘭に話すから。」

「しんいち、いつかいなくなっちゃうの？」

「…わかんね。でも、人間だっていつか死ぬだろ。」

「…じゃあそれが、しんいちの約束。」

そう言って、お互いの小指を結んだ。

たぶん、本当には理解出来てなかったと思う。
子供だったし、現実に”死”について考えた事なんか無かったんだから。

でも、蘭は指を離さなかった。

「蘭？」

「…ねえ、もうひとつ約束しようよ。ふたりで守る約束。」

「ふたりで？」

「うん。なにかないかなあ？」

「なにかって言われても…おれ、なにも…」

「じゃあ…ねがいごとはないの？それを一緒にかなえるの！」

「ねがいごと…？」

「もしも、本当に叶うんだったら。」

「だけどそんな事、望むだけ無駄だ。」

「言葉にしたって虚しいだけで、蘭を困らせるに決まってる。」

ふと、窓の外を眺めた。

「オレはこの家から外に出た事があつたんだろうか。」

目覚める以前の記憶が無いから、此処から外の世界がどんなものか分からない。

見える景色は四角い枠に切り取られていて。

「なんでもいってよ。わたしがかなえてあげるから！」

蘭は優しく微笑んだ。

彼女の言葉は、いつだって本当に優しくかった。

その笑顔も、声も。今では絶対失いたくない。

あの日から蘭が居たから、オレは自分を失くさずに居られたんだ。彼女が居なくなったら…そんな事、想像すらしたくないくらいに。

…たぶん初めて逢った時からずっと。

オレは、蘭の事が…。

「…そら。」

「…え？なあに？」

「…そら、がみてみたい。」

「そら？そらなら、どこからでもみえるよ？」

不思議そうに首を傾げた彼女は、窓を指差した。
普通はそうだ。

区切られていない空を何の意識もしないで見ていられたら、オレだ
ってきつと分らない。

ずっと疑問だった。

この枠を含めた景色しか知らないはずなのに…果てのない空を見て
みたい、なんてのも変な話だけ。

いつか、蘭と同じ空を見られたら…

そう思った。

—

数日後。

いつもより遅い時間に来た蘭の様子は、少し違っていた。

「あ、しんいち！」

「どうしたんだよ、その荷物。」

小さな体に両手いっぱい大きな袋を下げた蘭が、よたよたと近づいてくる。

一度袋を床に置くと一息ついて、オレに笑いかけた。

頭には少し雪が積もっている。

「ねえしんいち。きょうは、ずっとホームズよんで？」

「は？なんで？」

「いいから、ね？」

そう言った蘭に背中を押され、父さんの書斎に押し込まれた。

「おい？なにをするつもりなんだよ！」

「ひ・み・つ！あとで教えてあげるから……」

勢い良く扉を閉め、走り去っていく音が聞こえる。

その後は静まり返り、廊下の様子を見ても変わった様子は無かった。

「……なんなんだよ、ったく。」

仕方なく、読みかけの小説を手取る。

昔は難しい漢字は読めなかったから、その度に辞書で読み方と意味を調べていて、1冊読み終えるのには相当時間がかかっていた。

それでも謎を読み解く様な感覚で楽しくて、蘭が居ない間はずっと本ばかり読んでいた。

本当は蘭と居た方が楽しいんだけど……

（そういえばさっき…蘭の頭に雪、積もってたな。）

ふと思い出してカーテンを開けると、薄暗いグレーの空に粉雪が舞っている。

色とりどりの屋根に薄く積もり、見慣れた景色は違う街みたいだった。

向かいにある変わった形の家。

あれは確か子供の玩具とかを発明している科学者の家で、個性的な飾りが施されている。

その飾りの一つに刻まれた文字。

「めりー…くりすます？あれ、今日って何日だっけ…」

眠らなくなってから時間の感覚が無くなっていた。
壁にあったカレンダーを眺めて、数えていると…

「?!なんだ?!」

どこからか、もの凄い音がした。
何かが倒れて引っくり返った様な音。

過ぎったのは蘭だった。

「おい蘭？！何かあったのか？！」

廊下から呼びかけると、向こうの部屋から蘭が顔を出した。
その部屋は子供部屋…つまり、オレの部屋だ。

「だ、だいじょうぶだから！」

「ほんとに何やってんだよ？！」

彼女はその問いに答えず、すぐに部屋の中へと消えてしまう。
駆け寄って扉を引いても開かない。

「蘭、あけろって！」

「だめ！もうちょっとまって！」

あまりに必死な彼女の声。

オレはそれ以上何も言えずに、仕方なく手を離した。

…それから書斎に戻って、もうだいぶ時間が経っている。

蘭が考えている事が全く理解出来なくて、オレは溜め息ばかりついていた。

せっかく会えたのに別々の部屋で何してんだか…意味が分からなくて笑えてくる。

すでに沈みかけの夕陽。

白い景色が朱く染まり、所々でイルミネーションが点灯し始めていた。

（蘭のやつ、さすがに終わったかな…）

彼女が居る部屋の前に立って、そつと中の様子を探ってみた。

物音はもうしない。

恐る恐る扉を引くと、鍵は開いていた。

「…らん？」

返事は無い。

しん、と静まった部屋は、開け放たれたカーテンから夕陽が差し込んでいた。

その光景に思わず声を失う。

「…え。」

広がるのは、大きな空だった。

真っ白で何も無かった天井に、青空が描かれている。

夕陽に染まって、まるで本物の空みたいで。

「すげえ…」

思わず呟いた言葉は本心だった。

大きな太陽と、様々な形に沢山描かれた雲。

今まで、こうして空を見上げる事なんて出来なかったから。

視線を落とすと目に入るのは、床一面に散らばった水彩絵の具。

沢山の筆と、引っくり返った筆洗器。

そして天井まで届く高い脚立。その傍には眠っている蘭の姿があった。

「ん…しん、いち？」

「蘭…これ…」

「…そら、みてみたいって言ってたから…」

蘭は目を擦りながら起き上がった。

服も顔も絵の具が付いていて分かりにくいけど、頬を怪我していて膝に痣がある。

もしかしたら脚立から落ちたのかもしれない。

…どうして、そこまでして？

あんな願いを叶える為に。

「しんいち。きょう、何の日だかしってる？」

「え？」

「クリスマスはね、プレゼントがもらえるんだよ。だから…しんいちにあげる。」

言ってしまえば、所詮子供の落書きかもしれない。

だけどオレには充分過ぎた。

代わりに彼女にあげられる物なんて何も無かったけど…

少しでも感謝の気持ちが伝わるように。

「ありがとな、蘭。すげえうれしいよ。」

「どういたしまして！」

蘭も満面の笑顔で答えた。

「いつか、いつしよにみよう？…もっとおおきいそら。」

「…そう、だな。いつか絶対、いつしよにみようぜ。」

「じゃあこれが、ふたりの約束ね！」

それくらいなら、きつといつかは叶えられる。そう信じた。
目の前は真っ暗で何も見えなかったから。

…本当はそんな約束すら守れないって。

「これ…かあさんがみたら怒るかもな…」

「…へ？やっぱりだめ、だったかな…？」

まだ何も知らずに、ふたりで笑い合っていた。

――

8（彼の気持ち）

「いつか一緒に本物の空を見よう」

そんな些細な事すら叶わないまま月日は流れ、蘭は中学生になった。制服を着た彼女は急に大人っぽく見えて。

…あの時交わした約束に迷い始めていた。

学校帰りに毎日ここへ来る蘭は、部活や遊びも我慢しているのかもしれない。

普通の生活を犠牲にしているなら、そんなの本当に幸せなはずないって分かってるのに。

「もう来るな」とは言えなかった。

オレは彼女に会いたかったから。

―― 8（彼の気持ち）――

「新一。今日…泊めて。」

「…は？」

「こんなに沢山部屋があるんだから、ひとつくらい借りてもいいでしょ？」

「いや、そういう問題じゃなくて…何かあったのか？」

その日は彼女の様子が変わった。

ソファ―に座っていたセーラー服姿の蘭は、膝の上の掌を固く握り締めている。

下を向いたままで、その表情は読めない。

けど「帰らない」意思を断固譲る気は無いらしい。

「…お父さんなんて…だいつ嫌い。」

ぽつり、と呟かれたその一言から、何となく理由を察した。

蘭と彼女の両親は昨日、久しぶりに3人揃って食事をすると言っていた。

（両親は彼女が小学生の頃に離婚していて別居中）

恐らく父親が原因で母親と喧嘩か…まあ何かしら起こって、最悪な

食事会になつたんだろう…

昨日ここから帰るまでは「これからお母さんと会える」と本当に嬉しそつだったから。

「お父さんと顔合わせたくないの。」

「でも、中学生が帰って来なかったら心配するって。」

「…いいよ、そのくらい。一人で頭冷やして欲しいから。」

「後ですげー怒られるんじゃないの?」

「いいってば。…新一は…迷惑?」

上目遣いに睨んだ瞳に涙が浮かんでいる。

ここまで頑なになつてしまうと、きつと此処から無理やり追い出しても家には帰らない。

「…わーったよ。でも電話はしろよ。」

「…うん。」

渋谷承知した蘭は、受話器をとった。

父親は外出中なのか留守電らしく「今日は友達の家泊まる」とだけメッセージを吹き込んでいる。

場所を伝えないのはせめてもの反抗なんだと思う。

しばらく背中を見せたまま突っ立っていた彼女は、振り向いた時にはいつもの笑顔だった。

突然何かが吹っ切れた様に、声のトーンも元通りになっている。

「新一！今日は朝まで遊べちゃうね！初めてじゃない？」

「え？あー…蘭が寝なきゃな。」

「寝ないもん！楽しみだね」

蘭が楽しそうなのはいいけど…微妙に複雑な気分だ。

（本当に何にも意識してねえ…）

「へ？何か言った？」

「…なんでもねーよ。」

一方通行だから。そんなの分かりきってた。

「でね…園子はC組の男の子がカッコいいって、いつも話してて…」

時刻は0時を過ぎている。

眠くなるどころか余計元気になった様にすら見える蘭は、相変わらず笑顔で会話を続けている。

内容は大半が友達の恋愛話。

オレは他人の恋愛に興味なんて無かったから、少しウンザリしている。

かなり無意識に言葉にしまった。

「蘭は学校に好きな奴いねーのかよ？」

「へ？」

(……………あ。)

発した後すぐに後悔した。そんなの別に聞きたくない。

居るって言われたらどうすんだよ？
いや、居た方がいいんじゃないか？

答えの出ない問題がぐるぐる回る。

「…や、やだ。居るわけじゃない!」

顔を真っ赤にした蘭は、両手を大きく振りながら全力で否定した。

その姿は逆に言えば思いっきり肯定してる。

「き…急に何言い出すのよ? 新一のばか。」

(こつという時に分かりやすい性格って…)

凶器以外の何物でもない。

彼女が否定すればする程、心臓に突き立てられたものが傷口を抉る様な気がした。

…オレはともかく。

それならそれでいい。蘭の為には良い事だし…

なんて冷静に頭で考えながら、自分でも分かるくらいに機嫌が悪くなっていく。

でも絶対知られたくない。

「…蘭にも好きな奴とか居るんだ。」

「だから居ないってば！」

「オメー分かりやす過ぎなんだよ。嘘も下手だし。」

「そ、そんな事ないもん。」

「認めろって。」

「…ど、どうしたの？何か怖いよ？」

…ダメだ。

何かイライラしてくる。

まあ仕方ないよな…

学校に行けば色んな奴と知り合うんだし、いつまでもガキみてーに遊んでばっか居られない。

いつかそうなるんじゃないかって覚悟はしてたんだ。

オレは彼女の『幼馴染み』で『親友』なんだから。

「どんな奴？」

「…し、新一になんか教えない！」

「“幼馴染み”として心配してやってんだよ。」

蘭は俯いて黙った。

しばらくすると真っ赤になった顔を上げ、オレの正面に向き合って座り直した。

何となくオレまで身構えてしまう。

「…し、新一の言う通り。居るよ、ほんとは…好きな、ひと。」

(……自分で聞いた癖に。やっぱり聞きたくなかったな……)

オレが”ふつう”だったら迷わず蘭に気持ちを伝えたい、他の奴になんか絶対渡したくないのに。

でも、それは出来ない。

今までもどうしても言えなくて、これから先も伝える気なんか無い。

彼女を繋ぐ枷は、あの約束だけで充分重過ぎる。

「その人…意地悪だけど優しいの。素直じゃないけど…本当は可愛いところもある人だよ。」

「…はあ？何だよそれ。ただの強がりじゃねえか。」

「うん、そうかも。でも…辛い事や苦しい事があっても、絶対に他^ひと

人には見せないの。それって本当に優しくして強いって事だよな？」

「…どーだかな。」

「私は、もつと彼に弱い所も見せて欲しいんだけど…私じゃ頼りないのかな。」

蘭が”そいつ”をどれだけ好きなのかなんて、顔を見れば分かってしまう。

それくらいに優しくして、寂しげな笑みを浮かべていた。

（マジで聞くんじゃないかった…）

思わず視線を逸らした。

目が覚めた時からずっと一緒に居て、この世界で存在を認めてくれたのは蘭しか居なかった。

最初は誰でもいいから傍に居て欲しいと思ったし、もしかしたら蘭じゃなくても『幼馴染』や『親友』として心は許せたのかも知れない。

それは否定しない。

…だけど、違う。

今まで自分が彼女をどれだけ想っていたか思い知らされる。

「…本当に好きなら、伝えた方がいいと思うぜ?」

「…………え?」

「伝えたくても伝えられない奴だっけ居るんだし。」

「それって…どんな?」

…普通それ聞くのかよ?

思わず本音を言いそうになって、慌てて取り繕った。

「んなの色々あるだろ。言いたくても言えない、めんどくせー理由がある奴はいくらでも居るんだよ。」

「…そうかもしれないけど…」

「だから頑張れよ。…応援、してやっから。」

「…うん。わかった…」

…有り得ない。

応援なんか出来る訳ない。

だけど蘭が幸せなら、一人になったっていい。

今まで充分過ぎるくらいに楽しかった。それが特別だったんだ。全てが在るべき状態に戻るだけ。

（なのに、どうしてこんなイラつくんだ…）

油断したら本音を言ってしまいそうだった。

これ以上彼女が近くに居たら離したくなる。

冷静になれない自分が情けなくて頭を抱えた。

「…新一？」

蘭の声に顔を上げると、何故か彼女が隣に座って覗き込んでいた。少し赤面した彼女が近くて、自分まで体温が上がった気がする。

「…?! な、んだよ？」

「新一は…その…別に何とも思わないんだよね…？」

「え？何を？」

「わ、私が誰かに好き、とか…そうゆづの伝えたりすること。」

（……………は？）

…一瞬、彼女が何を言ってるのか理解出来なかった。

ただその間、蘭をぼーっと眺めていて……。

彼女の表情^{かお}や、仕草。

たぶん目を逸らしたくて仕方ないくらい恥ずかしいのに、精一杯見つめてくる瞳。

「嫌だとか、思ったり…しない、よね？」

彼女の「好きな人」。それが誰だか分かってしまった。

（嘘、だろ…どうすればいいんだよ…）

思考をフル回転させても答えは出ない。

感情で言ってしまったら、きっと後悔する。

だけど、彼女を他の男になんて渡したくない。
本当はずっと傍に居て欲しい。

なら、伝える………？言ってしまったばったの二文字の、その言葉を。

また、増やすのか？
守る事すら出来ない約束^{ちかい}を。

…やっぱり、言えない。

なのに蘭を引き寄せていた。

「……………ごめんな、蘭。」

「どうして謝るの……？」

耳元で聞こえる蘭の声は、少しだけ震えていた。
彼女の華奢な体は凄く熱くて、どれだけ懸命に想いを伝えようとしてくれたかがよく分かる。

「……………すぎ。だいすぎ…新一。」

それなのに、どうしても答えられなくて。
代わりに強く抱き締めた。

「彼女の為に」駄目だって分かってるのに離したくない。
「自分の為に」離したくないくせに、たった一言が言えない、なんて。

都合がいいように、綺麗事ばっかだな。

矛盾してる。

.....最低だ。

.....

9（彼と彼女の相違）

頭では理解しているはずだった。

彼の本心じゃなくて、きっと私の為に”言ってくれた”言葉なんだ
って。

…それでも。

「どう、して…?」

本当の気持ちを教えてくれないの？

いつも、いつも…

そんなに私は頼りない…？

私なんかじゃ弱音を吐きそうって思ってる…？

全然分かってない。

私一人は弱くても、貴方が居れば強くなれるのに。

先の事なんて考えなくていいから。
”ずっと傍に居て”って、そう言って欲しかった。

溢れ落ちる雫が世界を滲ませていく。

こころが離れる事が、こんなに苦しいなんて知らなかった。

―― 9（彼と彼女の相違）――

『久しぶり！ほんまに電話くれたんやね！』

「久しぶり、和葉ちゃん。」

『蘭ちゃん、風邪？鼻声やで？』

「大丈夫…ありがとう。…ちょっとお願いがあってね…」

家に帰る気分にはなれなかった。

新一の家を飛び出してから、どれくらい経っただろう。

すっかり陽の落ちた公園のベンチは冷たく冷え切っている。

晴れ渡った夜空は星がよく見えて、余計に胸が締め付けられた。

いつからだろう。

私は空を見上げるのが癖になっていた。

その度いつも、彼を想って…

” いつか一緒に本物の空を見よう ”

あの約束がある限り、繋がっていられると信じてた。

やっと止まった涙が、またじわり、と滲む。

『お願いって?』

「…あのね、」

「聞きたいの。新一の本音。」

「急にどうしたんだよ？」

…ついに聞いてしまった。

聞きたくて仕方なくて、それでも聞きだせずにいた”彼の本当の気持ち”。

緊張のせいかな、少し体が震える。

心臓がどきどきして、呼吸が苦しくなる。

最悪の返事が頭を過ぎって、その度「そんな事絶対無い」と頭から振り払った。

…怖い。

怖いけど、まだどこかで信じていた。

「んな怖えー顔すんなよ。」

「…誤魔化さないで。」

あくまで笑顔を崩さない彼。

きつとまた、どうにか曖昧にするつもりに違いなかった。

私も、ほんの少しだけ決意が揺らぎそうになる。

今笑つて”冗談だよ” 　　って言つてしまえば、明日から今まで通り一緒に居られる。

「好き」だなんて言葉で聞けなくても、私が彼を好きだから。

自分が好きな人と一緒に居られたら、それで充分じゃない…？

もし彼の口から一番言つて欲しくない言葉を聞いてしまったら……私
はもう笑えない。

だ
け
ど
…

新一が私の事、本当に想ってるって言うてくれたら……これから先、何があっても強く居られる。

死ぬまですつと新一と居たい。新一が望んでくれるなら。

周りの事とか、私の将来とか……そんなの何も考えなくていい。

だから……言っ
てよ。

「……………」

「答え、られない…?」

新一は気まずそうに目を逸らした。
その仕草に胸が締め付けられる。
彼の表情が見えない。

どうして…?

私はこんなに、新一だけを見てるのに。

胸の中で、どろどろした嫌な感じが渦巻いてる。
…泣きそうになるのを、唇を噛み締めて堪えた。

こんな事言いたくないのに。

「…私しか居なかったから?だから、仕方なく、なの?」

「…蘭、」

「抱き締めてくれるのも、キスしてくれるのも、全部”私の為”？
私が新一を好きだから…？」

「いや…、」

「新一は…誰でも、良かった？私じゃ…なくても………っ」

…止められない。

彼にぶつける不安も、流れ落ちる涙も。

言葉を濁す彼に、こんな事を言い放つ自分自身に、イライラする。
たくさんの想いが込み上げてきて、こころの整理が出来ない。

こんな事聞いたって、彼は答えてくれないって知ってるのに。

どうしても怖くて。

心の何処かで、ずっとずっと怖くて。

彼と出逢った日。

彼と約束した日。

彼に「好き」と伝えた日。

彼と一緒に過ごしてきた、今までの日々、全部。

楽しくて仕方なくて、嬉しくて、幸せで…
その分、いつか失うのが怖かった。

新一は私から離れようとしてる。
それに気付いてたから。

「…蘭。」

新一は、きっとこの日を待ってたんだ。
私がいつか不安に耐えられなくなって、
こうして弱音を吐く日を。

「…ありがとな。」

だから、彼の答えは。

「オレはお前の事、幸せになんて出来ない、から。」

私だってそれを分かっていたはずなのに…

「…もう、来るなよ。今までほんと…ありがとう。」

彼が選んだのは、お別れの言葉。

それなのに、私達はお互い笑顔だった。

「…優しいね。新一…。」

「…何処が。」

「優し過ぎるよ…」

新一は何も理解してない。

私の”幸せ”は私が決めるもののに。

私にとって彼が居ない世界なんて有り得ないのに。
自分が居ない方がいいと信じきってる。

彼は今まで、きつと凄く苦しんで、悩んできた。

顔や言葉に出さない新一の、本当の気持ちまでは分かってあげられなかったかも知れないけど…

その彼が出した答えは、彼にとっての唯一の結論。

そう思うと、それ以上何も言えなかった。

「…ひとつだけ、聞いてもいい…？」

「…ああ。」

「私の事…嫌い、だった？毎日来るの…面倒だって思ってた…？」

「嫌いなワケ、ねーだろ…」

嘘でもいいから、嫌いって言ってくれればいいのに。

…ほんと…ばか、なんだから。

「約束…解消、しようぜ？」

まるで”あの日”みたい。

二人でお互いの小指を絡めて、誓う。

”あの日”と違うのは、私の頬に伝う涙。

そして『“こころ”を繋いだはずの”約束”を、解く為の”誓い”であること。

無理矢理繋いだつもりでいたのに。
ずっと繋がって居られると思ったのに。

…やっぱり、

解けた。

10（シアワセの定理）

変わらない日常。

いつも通りの時間に起きて、学校に着いたら授業を受けて、親友達と他愛ない会話で笑い合う。

空を見上げない様に意識して、常に下を向いて歩いた。

それなのに、どうして離れてくれないんだろう。

いつもどこかで想ってしまう。

通学路の歩道橋。

学校の渡り廊下。

夕暮れの帰り道。

ふとした瞬間に、胸が締め付けられる。

彼はどこにも居ないのに。

”…逢いたいよ。”

「大丈夫？」

「ごめん…園子。」

4限目の体育の時間。私と蘭はジャージ姿のまま、保健室に居た。顔面でバレーボールを受けた親友の鼻の頭に、絆創膏を貼ってやる。その姿はちよつと情けなくて、でも何だか可愛いらしくて笑えちゃう。

「またボーつとして…どうせ”彼”の事考えてたんでしょ？」

「ち、違うわよ！」

「じゃあ何考えてたの？」

「…今日の夕飯、何作ろうかなあって。」

「相変わらず嘘が下手なんだから。そんなんで運動神経抜群の蘭が、こんな怪我するわけないじゃん！」

ちよつと強めに反省を促すと、蘭は肩をすくませて俯いた。

彼女は最近、こんな事ばかり。

階段から足を滑らせて怪我したり、ドアや壁にぶつかったり…
小さなものまで含めれば、もう数え切れないくらい。

「まさに”心此処に在らず”って感じよね…」

「…そう、かもしれない。」

原因は分かっている。

最近聞き出した”彼”のこと。

数日前に「本当に好きなのか聞いて来なきゃ！」と私が言い出した
のが全ての始まり。

それが原因で”彼”から別れを告げられてしまったらしく…

蘭は「自分も聞きたかったから園子のせいじゃない」って言うけど、
やっぱり私は責任を感じていた。

だから余計に蘭には笑っていて欲しくて。

気付くと落込んで暗い顔をしているから、私は常に明るく振舞った。

「でもさ、今度の休みは例の彼が来るんでしょ？」

「え？ああ…服部君ね。」

「この際、彼に乗り換えちゃえば？彼、中タイケメンじゃない？」

「やだ、そんなんじゃないよ！それに服部君には、可愛い幼馴染み

「が居るんだよ？」

「なあんだ、そうなの？電話で呼ぶだけで大阪から来てくれちゃうなんて、てつきり蘭に気があるのかと思ったのに。」

本当は少しマジに期待してたんだけど。

新しい恋をすれば、蘭も元気出るかも知れないって。
でも彼女の様子からして…その可能性は無いか。

「…ちよつと、理由があつて。」

言葉を濁した蘭は、その先を言うべきか迷っているみたいだった。
俯きがちに視線を泳がすと、何かを決意したように真っ直ぐ私を見つめる。

「…信じてくれないかもしれないけどね。私、本当は探偵なんか出
来ないの。」

「へ？」

「今まで事件を解決してくれてたのは、全部”彼”。私は彼の推理
を、自分の推理の様に話してただけで…それはもう、続けられない
から。」

服部君を呼んだのは、その事で…なの。」

「…???ち、ちよつと待ってよ。もし本当にそうなら、今まで何

の為に蘭が探偵やってたわけ？」

「…話すよ、全部。やっぱり園子に隠し事してるの辛いもん。嘘みたいな話だけど…聞いて、くれる…？」

蘭の真剣な表情に、私は覚悟を決めた。

彼女がこれから話すことが何であろうと、受け入れるって。

——親友、だから。

…そう、思ったけど…………

「…ま、待って。頭が混乱してきた。つまり…その”新一君”って…」

全てを聞いてみると、それは想像以上に現実離れしていた。蘭の言葉ひとつひとつが夢物語みたいな話で。

「怖く、ないの…？だって蘭、そういうの一番苦手じゃない！」

「…全然怖くなんかないよ。新一は新一だもん。初めて逢った時か

らずと…」

普通なら絶対信じられない。

それどころか、この人アタマ大丈夫なわけ？とか騙そうとしてるんじゃないの？とか絶対怪しむ。

でも、蘭はそんな奴じゃない。

私には分かる。彼女は嘘なんかついてない。

頭では理解出来るんだけど…

「やっぱり…信じられない、よね？」

「う、うん…正直言うとな。まだ受け入れるのに時間かかりそうっていうか…」

「…変な事言つてごめん。今の、忘れて…？」

（——あれ？）

この感じ。前にもこんな事があつた様な……

” 何でもない…きょうは留守みたいだね。
”

ずっと昔、蘭はそう言いながら今みたいに笑った。
…いつだったっけ？

あの時も、凄く悲しそうで…

何でかは分らない。

でもそれが過った瞬間、不思議と私の心は決まった。

「確かに夢みたいなお話だけど…でも私、蘭の事は信じてるから。」

「…え？」

「蘭がそう言うなら信じるってコトよ。今まで蘭が私に意味無く嘘ついた事なんて無いもの！」

「…ほ、ほんとに？信じてくれるの？」

「もちろんよ！それなら”新一君”が蘭に”好き”って言うてくれないのも納得だしね…」

だったら尚更”彼”には悪い事をしてしまった。

本人にしか理解出来ない理由があつたのかも知れないのに…

「でも蘭なら彼の意思を変えられるんじゃないの？それだけ好きなんだからさ。」

「新一は…強いから。私がどんなに好きで居ても変わらないよ。」

…分かってないんだから。

「馬鹿ねえ。」

「へ？」

「強く見える人の方が本当は脆いのよ。”自分が弱い”って分かってる奴ほど実は強かで世渡り上手、ってね。家柄のせいで色んなトコのお嬢様達に会っけど…そんなもんなのよ？」

あなたには人を変えられるチカラがあるのに。
私だって、その中の一人で…

本人は気づいてないなんてね。

「工藤”…この家かあ。」

古びた外装が威圧感のある”幽霊屋敷”。

噂では聞いてたけど、まさかこんな住宅街にあるなんて予想外だった。

初めて来た…はず、なのに。

（ん…？此処って前に一度…）

来た事があるかもしれない。

確か小学生になるかならないか、くらいの子供の頃。

蘭に連れられて…

何でだった？

肝試し、とか？

…いや、違う…。

（待てよ…確か蘭の彼は”新一君”…。あの時も確か…）

”ねえ園子ちゃん！あたらしい友達ができたから紹介するね！”

——”『…』

『…』っていつの…”

「……………！！」

そうだ…蘭は言った。

”『しんいち』っていうの…”

「…………まじ？」

霞がかっていた記憶が晴れると、自然と体が強張った。
鳴らそうとしたインターホンの前で指が止まる。

あの時私には誰も見えなかったから、聞いたんだ。

誰と話してるの？って。

そしたら蘭は驚いた顔して、寂しそうに”何でもない”って笑った。

”きょうは留守みたいだね”って…

「…お、面白いじゃん…」

この肌寒い中ブレザーを腕捲りして気合を入れた。

「お邪魔しまーす…」

運良く鍵は開きっぱなし。

薄暗い玄関。

広くて長い廊下やリビングも人の気配は無い。

（中は綺麗なんだ…かなり広いし。ま、うちには劣るけど。）

無意識に忍び足になる。

誰も居ないらしいのは分かっていても、勝手に侵入している罪悪感かも知れない。

階段を昇ると目に入るのは、一つだけ開いた扉。

（わ、凄い数の本…！）

今まで色んな豪邸へ連れて行かれたけど、壁一面の大きな本棚は初めて見た。

あまりの迫力に思わず足を踏み入れる。

はっとして慌てて見渡しても、もちろん誰も居ない。

ただ、机の上に開いたままの分厚い本が置いてあって…

この家の中で唯一の「気配」を感じた。

「えーっと…」新一君”？…居るの？」

返事なんかあるハズない。

自分の声が虚しく響くだけ。

「…ま、居ると仮定して話すわ。私は鈴木園子。蘭の親友。」

相変わらずしん、と静まり返った部屋。

でも…なんだろう？誰も居ないのに、独り言な気はしない。
不思議な感覚。

「まず、勝手に家に入ったのは謝るわ。けど、開けっぱなしのアンタも悪いのよ？…って、そんな事言いに来たんじゃないけど…」

心に届かなくても、いい。

それでもいいから、ただ、聞いて欲しい。

「新一君”は、間違ってる。」

きつと聞こえている。

何の確信も無いけど…

もしも本当に”あの時”、”彼”が私の目の前に居たんなら。

今が”あの時”と同じなら…

「蘭の幸せは、蘭自身が決める事なのよ。それはいくら長年一緒に居たアンタだって、私にだって決める権利は無いの。そう言ったら『オレの気持ちなんてお前に理解出来るか！』って、怒るかもしれないけど…」

言葉にする度溢れる、大切な親友への思い。

落ち込んだ顔は、あの子には似合わない。

「アンタが普通だろうと普通じゃなかつと、そんなの関係無いわよ。

ていつか大体ねえ、”普通”って誰を基準に決めるわけ？」

いつもどこか、周りには距離を置かれてた。

遠慮がちに接する表面上だけの”トモダチ”。

私と仲良くすれば得をする、なんて魂胆見え見えで…

心のどこかで違和感を感じていても、常に沢山の人に囲まれている事に”シアワセ”を感じてた。

独りになりたくなかったから。それが一番怖かった。

だけど蘭に会ってから、そんなの自分に嘘ついて、誤魔化して…目を逸らしていただけだって、思い知った。

「本当は親友として少し不安だけど…蘭が信じてるアンタを私も、信じるから。」

彼女は財閥のお嬢様とか、そんなの関係無く私を一人の人間として見てくれた。

間違っている時は怒って、楽しい時は一緒に笑って。本当の意味での幸せを教えてくれた人。

一番の親友だから。

——お願い。

「…蘭の傍に、居てよ。」

それが”新一君”にとってもシアワセな事なら……………」

その人にとって何が幸福で不幸か、なんて自分自身の判断でしか無いんだから。

「”シアワセの定理”なんて、色んなカタチがあっただっていいんだからさ……」

まるで、あの頃の自分に言い聞かせてるみたいで涙が溢れた。

11（いつかの真実）

「…つまり、これは犯人によって意図的に作られた偽物の証拠つちゆーわけや。」

「だ…だとすると犯人は、まさか…」

「こんなん出来る時間あったのは一人だけやで？」

休日を利用して東京まで来てくれた服部君に新一^{かれ}の事を相談するつもりだった。

なのに今私達が居るのは、都内のあるマンションの一室。
そこに居るのは数人の警察と容疑者。

つまり目の前に横たわるのは、もちろん…

（…直視出来ない。）

私は気分が悪くなるのを堪えながら、少し離れた場所に和葉ちゃんと立ち尽くしていた。

——「おい、待て!!」

目暮警部が突然発した大声。

「和葉!姉ちゃん連れて逃げろ!!」

「ら、蘭ちゃん!!」

視界に入っただのはナイフを構えた犯人。

追い詰められた物凄い形相で、真っ直ぐに私達の方へ走ってきてい
て——

「...え?」

——11(いつかの真実)——

「いやー、すまなかったね蘭くん!」

「あはは…」

「ほんまやで！あれ、何て技？めっちゃカッコええやん♪」

「空手部の先輩に教えて貰った技なの…」

「どない先輩やねん…」

呟いた服部君は呆れ顔。

私も何だか笑うしかない。

本物の犯人相手に空手技を決められる自分自身に驚いた。

偽物とはいえ探偵を続けてる内に度胸がついたのかも知れない…

「それにしても、推理も出来て空手まで強いとなると…もう無敵ね、蘭ちゃん？」

佐藤刑事の言葉にはっとする。

そうだ…この事もはつきりしておかないと。

「あの…目暮警部。」

「どうかしたかね？」

「今度、少しお話する時間をいただけませんか？」

「？構わないが…それじゃ、今日は協力ありがとう。帰りは高木君に送らせよう。」

「あ、お構いなく！駅まで近いんで、歩きますから。」

「そうかい？じゃあ、また。」

気絶した犯人を連行していく目暮警部達を見送り、私達3人はマンションの入り口に取り残された。

「…せっかく東京まで来て貰ったのにゴメンね。解決してくれてありがと。」

「ああ。それよりオレに相談したい事って…工藤の事か？」

「”工藤”って誰？蘭ちゃんの彼氏？」

「え？う、うーんつとね…その…」

「こないだ言ってた”彼”やろ？ちゃうのん？」

「和葉は黙ってるや！」

「何なん？その言い方！」

気がつくともた喧嘩。

（本当に仲良いなあ、この二人…）

他愛ない事で喧嘩して、気が付くともう仲直りしていて。
私と新一もそんな関係…の、はずだった。

だけど私達の場合は、お互いに口に出来ない本心を隠していた。
きつとそれが間違っていたんだ。

「蘭ちゃん！平次みたいなアホに相談したかて無駄や、無駄！！
相談ならアタシが聞くから、放って置いて行こ！」

「へ?!」

「何やとオ?! そんなんお前に言われとーないわ！勝手に東京まで
ついて来よって!!」

考え事してる間にヒートアップしていらしい。
和葉ちゃんが私の腕を引いて連れて行こうと引っ張る。

「ほら、行こ!?!」

「ええ?!?!で、でも…」

服部君と目が合うと、彼はニツと笑いながら小声で呟いた。

「姉ちゃんは和葉と気分転換してろや。どーせ”相談”されてもオンナゴコロなんてオレには分からへんしな。」

「…え？」

「オレは工藤んトコ行ってくるわ。男は男同士、ってな。何があつたかは知らんけど、あいつも姉ちゃんには話せない事あるやろし…」

「服部君…」

「あ、それと。」

「和葉は…ボケやけどまあええ奴、やから。工藤の事話しても信じると思っで？」

— !

それって…

やっぱり服部君は、新一の事知ってるって事だよね…？

「服部君、……！」

「ほな、また後でな！」

…服部君と初めて会った日の違和感は、間違ってたんだ。

彼は何故か新一の家を知っていた。

いや、そもそも何で私に会った後に新一の家に…？

服部君と初めて会った日。

”ご、ごめん新一！すぐ行くから！また後で電話するね！”

”？シンイチ…？”

新一の名前を聞いた彼は、どんな表情かおしてた？

その後すぐに彼は新一の家に行って…

”じゃあオメー此処に何しに来たんだよ？”

”オレと同じ本物の探偵をこの目で見ておきたかったんや。”

”それに此処は昔…”

彼は……………何を知っているの……………？

「…ちゃん？蘭ちゃん！どないしたん？」

「…あ、ごめん…」

服部君と別れた私達は、和葉ちゃんがずっと行きたかったというカフェに入った。

雑誌で紹介されているお洒落なお店で、可愛いインテリアや北欧雑貨が沢山飾られている。

和葉ちゃんは目を輝かせながらはしゃいでいて…

「この店、関西でも有名なんやで！」

「そうなんだ…このカプチーノも美味しいね！」

「やだ、それカフェラテやん！」

「…え？あ、ホントだ。」

対照的に私は、自分が何を注文したのかすら曖昧だった。

（だめだ…和葉ちゃんに悪いし、しっかりしないと。色々考えるのは後にしよう。）

せっかく東京まで来てくれたんだもん。
気を使わせてしまったら申し訳なさ過ぎる。

（笑顔、笑顔…）

「なあ、蘭ちゃん…」

「ん？なに？」

「蘭ちゃんさえ良ければ話して？」彼”と…何かあったんちゃう？」

「え。」

…私って本当に分かりやすいんだな…

和葉ちゃんに、新一との事を全て話した。

すでに園子に話して信じて貰えたという安心感と服部君の”和葉は信じる”という言葉から、落ち着きながら順を追って彼女に説明する事が出来た。

すると和葉ちゃんは予想外の反応で…

「か、和葉ちゃん？」

「はじめ…、辛いのは蘭ちゃん達やのに…」

彼女は泣いてくれた。

新一と別れたあの日から、私は泣くのを辞めた。

想いが涙になって流れ落ちてしまったら、私の中から消えてしまう

気がして。

どんなに泣きそうになっても、堪えた。
ただそれは、予想以上に辛くて。

今まで新一は、沢山辛い思いをしてきたはずなのに…
誰にも弱さを見せないって、涙を見せないってどんなに苦しいんだ
ろう。

その気持ちがやっと少しだけ分かった。

「ありがとう…和葉ちゃん。」

彼女が代わりに泣いてくれたお陰で、私は少し楽になった気がした。
私も新一にとってそんな存在になれたらいいのに。

「…蘭ちゃん達、このまま別れてしもたらアカンよ？絶対…」

「…うん。分かっては…いるんだけど。でも、どうしたらいいか分
からなくて…」

「簡単やん！」

「…え？」

「蘭ちゃんの気持ち、全部伝えればええんよ！言葉にして、ちゃん
と！」

工藤君がどうだろうと、蘭ちゃんは傍に居たいって…そう伝えれば

「！」

「…和葉ちゃん…」

「簡単、言ってもそれが難しいんやけど…言葉にせんと伝わらんもん。気持ちって…」

きっと彼女は服部君の事を想ってるんだろう。

幼馴染っていつも傍に居られる分、一枚の壁を越えるのが難しい。

私だって新一に気持ちを伝えるのには随分時間がかかった。

もし叶わなかったら…そう考えると、もう元の関係に戻れない気がして怖かったから。

でも、そうだよな。

考えてるだけ、想ってるだけじゃ伝わらない。

人間が何の為に言葉を使えるかって、それは。

きっと好きな人に想いを伝える為だよな。

「和葉ちゃんも気持ち伝えるの？」

「へ?! あ、アタシは平次なんか何とも…!」

「服部君、なんて言っていないよ? 私。」

「ら、蘭ちゃんの意地悪!」

二人で大好きな人を想って笑い合った。

幼馴染の事がずっと好き、なんて、お互いの気持ちは痛いほど分かる。

ありがとう、和葉ちゃん。

少し、勇気出たよ。

「ほんま最初は”平次の東京の女や!”なんて思ったのに…こんなに氣イ合っなんて。」

「そうだね！あの時はびっくりしたけど…。」

「そういえば服部君、”東京初めてじゃない”って言ってたけどよく来てるの？」

「ううん、最近はこのないだの修学旅行が久々のはずやで？」

「メッチャ小さい頃に東京行った話はよう聞かされてて、アタシてつきりその話の女の子かと…」

「…そう、なんだ？」

何かが心に引っかった。

その中に、何か真実が隠されている様な…

忘れていた大切な何かを思い出させる様な、そんな予感がした。

12（二人目の来訪者）

朝が来る度増えていたカレンダーの×印の数は、あの日から変わら
ない。

もう誰かの誕生日とかクリスマスだとか関係無いから。

日付の感覚が無くて、今日が何月何日だろうがどうでも良かった。

色褪せ、剥がれかけた青空を見上げながら考える。

もしも自分が消えて無くなる日が来るなら。

それはいつなんだろう。

数十年後…

それとも、数分後なのかもしれない。

ただでさえ不確かな運命に、必要とされるものを失った。

だとしたら。

意味なんてあるのか？

ここに存在^{いきて}る事に。

――12（二人目の来訪者）――

（…うるせー…）

数秒前から鳴りだした、不快極まりない連続のチャイム音。
たまに『幽霊屋敷』の肝試しとかで子供が悪戯する事があるから、
いつも通り無視していた。

けど、この感じ…

（…完全に遊んでやがる。）

童謡の『七つの子』に合わせたリズムで鳴らされ続けるそれには、
覚えがあった。

どれ位前だったか。でも比較的最近の出来事。
あまりの煩さに思わず玄関を開けた、あの時だ。

『くーどおー!? はよ開けろや! ガキが集まって来よったやんけ!』

『お兄さん、そんなに連打したら壊れちゃいますよ?!』

『いくら幽霊さんでも迷惑だよ!』

『大人気ねえ兄ちゃんだな!』

『うつさいわ! シツ、シツ! 向こう行っとけ!』

窓から見えるのは子供に囲まれた…服部平次^{あいつ}だった。

(何やってんだよ…)

追い払いながらも右手はチャイムを鳴らし続けている。
それを冷静に制止している小さな子供達。
端から見ればどっちが子供だか分かったもんじゃない。

放って置いても辞めそうにないので仕方なく玄関の扉を開けた。

「おい、テメーいい加減に…」

「工藤！やつぱ居たんやないか！」

視界に映るのは笑顔の服部。

それとは対照的に、子供達は全員呆氣に取られた表情かおをしていた。

「お兄さん？誰と話してるの？」

「く、クドウって…」

「い、今勝手に玄関開きましたよね…？」

視線が集中する。

徐々に恐怖に歪んでいく子供達の顔…

「（あ、やべ…）とにかく入れ！」

「おわ、急に引つ張んな！」

とにかく服部を中へ入れ、扉を勢い良く閉める。
それと同時に聞こえたのは子供の悲鳴だった。

「な、言つたやろ？居るならはよ開けろって。」

「あ、ああ…。」

服部は悲鳴を聞いても何てこと無い顔をして、服についた埃を掃っていた。

こいつとは、この間以前にもどこかで会った事がある。

妙な感覚だった。

けど、それが何かは今も結局分からないままだ。

「あーオレ、コーヒーで。」

「ねーよ、んなもん…蘭が置いてってる甘いヤツならあるけど…」

「なら、それでええわ!」

「…自分で淹れる。」

「自分、客に茶ーも出さんのかい!」

（…こいつ、やっぱり…）

文句を言いながら真っ直ぐ台所に向かい、食器が入っている棚も迷わず見つけている。

普通なら家主に聞かなきゃ分かるはずなのに。

「さすがにまた学校行事で来た訳じゃねーんだろ？」

「ああ、あの姉ちゃんに呼ばれてな。」

「…はあ？！何でオメーが蘭に呼ばれんだよ？！」

「んなのオレが知るかいな！」

「ら、蘭は？」

「さっきまで一緒やったけど。」

（…一緒に居た、だあ？！）

「とにかく…この際ハッキリさせたるやないか！」

ニヤリ、と不敵に笑う顔を見て、嫌な予感がした。

ハッキリさせる…？

何を？

…まさか…

「服部、お前…」

「ん？」

「蘭に気があるとかホザく気じゃねえだろうな？」

「…はああ？何でそうなんねん！」

「べ、別にオメーがそう言うなら止めねえけど…」

「…ぶっ…け、けどなんや？」

「あいつは…えーっと…怒りっぽいし。」

あと…恐ろしい程強いし面倒くせーから…や、辞めといた方がいいぜ？」

「…そやなあ。さっきオレも姉ちゃんの空手技見たけど、スカッとしたしなあ。」

「え？」

「それに綺麗やしスタイルええし…ほんまに惚れたりして…」

(…にやるー…！)

ニヤニヤしながら言い放つ目の前の色黒男。
言ってる事とその表情と。

さらには飲んでる物にまでムカついてきた…

「大体てめえ、和葉ちゃんとかいう彼女が居たんじゃねえのかよ！」

「か、和葉ア?! あんな彼女ちゃうわボケ!! 気色悪い事言つな
や!」

蘭から聞いていた服部の幼馴染「和葉ちゃん」。
会った事はないけど、こいつのこの反応…

「へー。でもお前は気があるんだろ?」

「あ、あるワケないやろ!! ただの幼・馴染・染や!!」

(…蘭の事は鎌掛けか。まあもうオレは何か言う権利なんか無いけ
どな…)

服部は軽く咳払いをしながら態勢を立て直している。

「…と、とにかく工藤と姉ちゃんが何あったかは知らんけど。
お前がそない好いてんやつたら、そっちは問題ないやろ。」

「…で、何なんだよ。わざわざまた此处に来た理由。」

「分かってんのやろ?」

さっきまでとは雰囲気が変わった。
しん、と空気が静まり返る。

服部は黙ってオレの返事を待っていた。

「…最初から知ってたんだろ。オレの事…」

——「当たり前。」

「…何をハッキリさせるって？」

「お前、ほんまに何も覚えてないんか？」

「ああ。この体になって目が覚める以前の事は記憶が無い。」

自分がどうしてこうなったのか。

何の為に今まで存在して来たのか。

不思議と無理に思い出そうとした事は無かったのに、服部こいつと会ってから変わった。

全てを思い出したら、きっと自分の「存在理由」が分かる。

そんな気がしてた。

「オレは昔、この家まで親に連れてこられたんや。で、そんな時お前にも会った。」

工藤がそないな体になる直前の…あの、瞬間…

オレはお前と一緒に居たんや。それに、あの姉ちゃんも。」

「…それ、蘭の事か？」

あの雨の日以前に、蘭にも会った事がある…？

「いつの、話だ…？」

「…辛いかも知れんけど。その方が、ここからの話しやすいからな。」

他人から見た、当時の自分。

忘れてしまった記憶。

バラバラのピースが集まっていく感覚…。

「く、工藤？」

「……………頭、痛え……………」

何時^{いつ}だった……………？

服部平次。

服部の両親。

オレの父さんと母さん…

それと……………蘭？

最初の記憶である、あの白い天井を見た雨の日よりも前。

意識を失^{なく}した、瞬間。

彼女はいつも独りだった。

自分と同じ葛藤を抱えているんだと悟った。

初めての親友。

公園とサッカーボール…

長かった雨が止んで、ノイズが晴れる様に。

—— 思い、出した……。——

13（彼女を守ると決めた日 e p . 1）

「工藤…大丈夫か？」

「…大丈夫、だから。話、続けてくれ…」

服部の言葉が、頭の中でイメージへと変換される。

それは間違いなく眠り続けていた記憶。
思い出す度に酷い頭痛を伴った。

やがて全てが鮮明に映り始める。

普通はそんなガキの頃の記憶なんて覚えてないんだろうけど…

忘れられるはず、なかったんだ。

初めて何かを本気で守りたいと思った、彼女と過ごした数分間を。

「ほら、新ちゃん。平次君に自己紹介してごらん？」

「平次。新一君に挨拶。」

突然訪ねて来たのは同じ年の少年と、その両親だった。印象的だったのは、3人揃っての不思議な語尾とイントネーション。ぼやっただけど”遠くから来たんだな”と思った。

「…オレ、新一。」

「お、オレは平次や！」

お互いに母親の足元に隠れ、少し人見知りしながら交わした挨拶。その後打ち解けるのに時間はかからなかった。

子供の頃から妙に背伸びして、誰に対してもどこか一步距離を置くのが癖になっていたオレにとって、服部は初めて出会うタイプの友達だった。

オレが距離を置こうが何だろうが、そんなの関係なく詰め寄ってくる明るい奴で。

悪く言えば図々しく、良く言えば気兼ねしなくて、一緒に居ると楽

しかった。

「平蔵さん、大丈夫かしら？お忙しいのに優作に捉まっちゃって…」

「いえ…こちらが先日お世話なつた事ですし。平蔵^{あのひと}にとつても、たまの息抜きにええでしょう。」

彼等がこの日此処へ来た理由は、推理小説家であるオレの父親にある。

以前父さんが大阪で工作中、本人曰くたまたま？事件に遭遇して解決に一役買った。

父さんが自分から首を突っ込んだんじゃ…という疑惑はさておき。

それがきっかけで大阪府警の平蔵さん（服部の父親）と知り合い、仕事で東京へ来る予定があつた彼に、工藤優作のファンという奥さんが息子を連れて無理矢理付いて来た…という訳だ。

「あら、またこのニュース…」

「物騒やなあ…犯人、まだ捕まらんようですね。」

「ええ。狙われるのは小さな女の子ばかりみたいで…」

テレビを眺めながら世間話に花を咲かせる母親達。
対照的に室内の遊びに飽きたらしい服部が呟いた。

「なあ、この辺どっか遊べるところないんか？」

「少し歩けばあるけど…サッカーでもしに行くか？」

「ええな！行こうや。」

「あ、新ちゃん。あんまり遅くならないですよ？平次君、帰りの新幹線の時間あるんだから。」

「わかってるよ。」

家から数分歩いた所には、地元の子供達が集まる公園があった。サッカーボールを手にして辿り着くと、いつもは賑わう広場に人影は無い。

（そついえば今日、仮面ヤイバーの最終回だったわけ？どうりで…）

歳に似合わず流行り物に興味が無かったオレ達は、遠慮なく広場を貸しきって遊ぶ事にした。

サッカーに詳しくないという服部に簡単に説明していると…

遠くから聞こえてきたのは金属が擦れる音。

「あれ？誰かおるな。」

「…ああ、あの子は…」

少し遠くにあるブランコ。独りで俯いたままの少女。それはオレにとっては見慣れた光景だった。いつも此処には先客が居たんだ。

「母さんの友達の子らしくてさ、いつもいるんだよ。」

「ふーん。やけに暗い顔やな。オレらと同じ歳くらいか…」

彼女とは前に一度だけ挨拶を交わした事がある。お互い母親と一緒に居て、ただ「こんにちは」と一言だけ。

本当はその時より前から彼女の事は知っていた。

いつもこの公園で、誰と遊ぶ事も無く独りきりで。

オレも両親の不在が多く、本当に気の合う友達も居なくて、独りでサッカーボールで遊んでいたから。ずっと彼女の存在に気付いていた。

聞かなくても分かったんだ。
彼女は自分と同じだって。

けど何となく話しかけられずに、挨拶した時も初対面のフリをしてしまった。

それから相変わらず話しかける事は出来なくて…………

親友と遊べる時間は、こうしている間にも刻一刻と減っている。服部が彼女に興味を示してやけに焦った事もあり、話題を切り替えた。

「そ、そういえばさ。おまえの言葉って変わってるよな。」

「大阪弁か？カッコええやろ？」

「大阪ってどれくらい遠いんだ？」

「新幹線乗ったら近いで。寝とったらあっちゅー間や！」

「新幹線、て時点で遠そうだな……」

「…まあな。また来たるわ。」

やっと気の合う親友と出会えたのに、陽が沈む頃には帰ってしまう。空はまだ明るいけど、伸びる影が別れの時間が近づいていると告げ

ていた。

いくら近い、と言っても子供には簡単に遊びに行ける距離ではないんだろう。

「それより、あの子や。」

「…ん？」

「オマエあの子が好きなんやろ？」

「?! な、なにいつてんだよ!」

「さっきわざと話そらしたやろ? オレの目はごまかせへんで?」

「だ、誰が…べつにオレは…」

「ほー…そうか? なら、オレがあの子と友達になつたろ。」

「ばっ…やめろって!」

「なんでや? 好いてないならオマエには関係あらへんやん。」

「か、関係はねーけど…」

あの子は特別なんだ。

下手に話しかけて、もしほんの少しでも傷つけてしまったら。

きつともう二度と、此処へは来ない。

触れたら壊れてしまいそうな、悲しくて繊細な雰囲気纏っていて…。

いつもずっと、たった独り。

好きだとか、そんなのはよく分からないし…そんなんじゃない。

たぶん。

ただ、独りにはしておきたくなかった。

彼女が自分と同じ葛藤を抱えているなら、誰よりも理解出来るから。

本音を言えば友達になりたいけど…

「ん？誰や、あのオッサン…」

服部の声に顔を上げると、あの少女の前に一人の大人が立っていた。全身黒ずくめの服。立てた襟と目深に被られた帽子で顔は見えない。けど、体格からして服部が言うように男だろう。

「あの子の父親…だと思つか？」

「いや…それにしては何か…」

彼女の反応が変だ。

目の前に立った人物は何か話しかけているのに、笑顔を見せる事もなく、ブランコから降りようとする様子もない。
それどころか体を硬直させ、恐怖に怯えて居る様に見えた。

「おい、服部。」

オレ達しか居ない公園。

辺りは少しづつ暗くなり始めている。

…嫌な予感がした。

「…家に戻って父さん達を呼んできてくれねーか？」

「なんでや？アイツが変なオッサンやったら、オレらで捕まえたらいええやんか。」

「ばーろ…大人相手にオレ達だけで勝てるかよ。」

「オマエはどうすんねん？」

「ここで様子みてる。」

「…わかった。ひとりでムチャすんなや？」

顔を見合わせて頷き合った。

服部が父さん達を連れて戻って来るまで、たぶん10分はかかるだろう。

（それまであいつが変な事しなければいいけど…）

男に気付かれない様に遠回りし、ブランコの近くにあるベンチの裏に隠れ、様子を伺う。

これも父親のお陰かもしれない。

数々の事件や自身の小説の話を聞いてきたせいで、緊張はしても、頭は冷静で居られた。

——「…や、やだあ！」

小さな悲鳴が響いた。

女の子は男に腕を引っ張られ、ブランコから引きずり降ろされそうになっていた。

必死で鎖に掴まっている掌が震えているのが、遠目でも分かる。

(…くそ、どうする…?)

頭を過ぎったのは、母親達の会話。

最近ニュースで報道されていた「少女連続殺人犯」。

その残虐な手口と、被害者に共通点が無い事から愉快犯だとされていた。

有力な目撃情報も無く、犯人は依然として逃走中、だと。

確かニュースでは隣町が主な犯行拠点だと言っていたけど…

まさか、米花町に？

この男がその犯人だとしたら………

だけど不思議と「逃げる」という選択肢は無かった。

あの子を助きたい。

助けられたら、守れたら…今度はちゃんと伝える。

友達になろうって。

もう独りじゃないって…

背も高くて体格の良さそうな大人の男。

子供が真っ向勝負を挑んだって勝てる訳がないなら、方法はただ一つ。

「…あ！ねえ君、蘭ちゃんじゃない？」

「…え？」

男に感づかれない様に、明るい声で少女に話しかけた。
たった今、ただ偶然公園に来て、知り合いに会った子供を装って。

真っ青になりながら涙を溜めた彼女が振り返る。
オレは笑顔を崩さない様に意識して、続けた。

「…その人、お父さん？」

「う、ううん…」

「じゃあ向こうで一緒に遊ぼうぜ？」

強引に彼女の手を取って、男から引き離れた。
その手はガクガク震えていて、安心させるように強く握った。
混乱しながらも抵抗する事無くついて来る彼女を連れながら、男の
様子を探ると…

背筋の凍る様な不気味な視線を感じた。

（…やべえな…）

「あ、あの…もしかして、しんい…」

「…話は後で。走れるか？」

「え？」

怖くなかったと言えば嘘になる。

だけどそれ以上に、ただ彼女を守りたいと思った。

彼女^{らん}を助けることで自分も救われる気がして。

…助けたかった。

目の前に広がる孤独という恐怖から。

14（彼女を守ると決めた日 e p . 2）

公園特有である無駄に見晴らしの良い景色が、今は疎ましくて仕方ない。

それでも陽が落ち始めて少し視界が悪くなった事と、子供の特権である小さな体が救いだった。

大人が通れない生い茂る木々の間を走り抜け、何とか”あいつ”を撒く事が出来た。

だけど、油断は出来ない。

今はかなり離れているが、”あいつ”はまだオレ達を探している。

しかも選択肢は無かったとはいえ、此処は出口とは逆側。

服部が戻って来るまで、ただ隠れて待つしかなかった。

— 14（彼女を守ると決めた日 e p . 2）—

（なんとか撒けたのはいいけど…これからどうする…？）

立ち入り禁止の札が掛かる柵の内側で考えていた。

下手に出て行けばすぐに掴まる。

大声を出したって近くに人の気配は無い。

一番厄介なのは、奴が本当に愉快犯である可能性。

見つかるのを覚悟で誰かに助けを求めた所で、その誰かが気付いてくれるまでにオレ達が無傷で居られる保証なんて無い。

殺傷行為そのものを愉しんでいるのなら、捕まる事なんて考えてないのかも知れない。

あの視線は、そう思わせるのに充分だった。

思い出すだけでも寒気がする。

心臓を鷲掴みされた様な嫌悪感で、吐き気すらした。

息を殺して様子を伺うと、ゆらゆらと彷徨っている不気味な黒い塊。全身黒ずくめで顔の見えない大男は、まるでこの世のものとは思えない化け物みたいだ。

「…あの…しんいち君、だよな？」

小さな声を震わせながら、彼女が呟いた。

恐怖のせいかな、相変わらず顔色は蒼白のまま。

「あ、ああ。大丈夫？…えっと…蘭、ちゃん。」

「うん…すごく、怖かったけど…助けてくれてありがとう。」

——初めて、笑った顔を見た。

こんな状況なのに一瞬見とれてしまっくらいに可愛くて。
思わず、繋いでいた手を離れた。

「…友達が、オレの父さん達を呼びに行ってくれてんだ。だからもうすぐ、あいつも捕まるよ。」

「う、うん…」

「それまでここでじっとして、隠れてようぜ。」

大きな木の幹の影に隠れ、得体の知れない存在から逃げながら。
初めてのまともな会話だっていうのに…苦笑いするしかないな。

幸い”あいつ”にはまだ気付かれていないらしい。
此処には背を向けて見当違いな場所を探している。

「ごめんね…」

「え？」

「あ、ううん。お花、踏んじゃってるから…」

この柵の内側が立ち入り禁止なのは、どうやら綺麗に咲き誇る足元の花達を踏まない様に、らしい。
オレは状況が状況だけに、そんな事気にする余裕すら無かったけど。

「…優しいんだな？」

「わたし、が…？…違うよ。」

蘭はじつと”あいつ”を見つめた。

その表情は怯えながらも、どこか悲しそうだった。

「あのひと…言ってた。これは復讐なんだって。」

「…え？復讐…？」

「あのひと、昔…大切な人がしんじやったんだって。事故、だったみたいだけど…ほんとうは、違う。」

誰かがやったんだって言ってた…それなのに”犯人”は証拠が足りなくて捕まらなかったんだって。

”犯人”に対する復讐…”最初”はその子供だった、って…”

一言つつ紡がれていく言葉。

普通の子供なら理解出来ないだろう。

オレは父さんの職業柄、彼女の言葉の意味が分かった。
彼女も呟きながら、懸命に自分自身に取り込んでいる様に見える。

「ひとり、ふたり…どんなに数を重ねても、ただむなしくなるだけ。
それはわたしの親のせいなんだ、って…わたしの親が”犯人”を逮
捕できなかったからだって。
だから、わたしで最後にするって言ってた…それできっと救われる
って。」

「…おまえの親、って？」

「お父さんは刑事で、お母さんは弁護士…なの…」

…どうりで、彼女がこの手の話を理解する訳だ。

「それでこれ以上事件が起きないならって思ったんだけど…」

「…なに、言ってたんだよ？おまえ…」

「だって…わたしは独り、だもん…お父さんもお母さんも忙しくて、
いつも居ないの。」

お父さんやお母さんの仕事の事で、色んな人から恨まれたり、いじ
められたり…

わたしなんて、居ても居なくても一緒なんだよ…？」

大きな瞳から、次々と大粒の涙が溢れ落ちていく。

「そんな事無い」って否定したくても、言えなかった。
オレもそう思っていたから。

両親にとって本当にオレは必要な存在なのか、って…

「でも、怖くて…怖くてしかたなかったの。助けてもらった時、すごく嬉しかった。

だからわたし、優しくなんてないよ…」

うずくまって泣きじゃくる彼女に、自分の姿が重なった。
心のどこかでは、本当は分かっているんだ。

父さんも母さんも、すごく大切に思ってくれてる事なんて。
きっと彼女の両親も同じ。

だけど他人の親子を見る度、広い家で独りきりになる度、また疑ってしまう。

もっと一緒に居たいのに、また独りになる。

親の前では平気な顔して。「偉いね」なんて褒めて欲しくて…

でも。

それとこれとは訳が違う。

「ばーろ！んな事言ってんじゃないよ！」

「…え？」

「どんな理由があつたって、人が人の命を奪う権利なんてねえんだよ。復讐なんて…絶対に間違ってる。

そんなの自分自身も追い詰めて、周りも傷つけるだけだよ。おまえが犠牲になつたってな、結局あいつの心が晴れる訳ねえし、おまえの親だつて苦しむんだぞ?!」

「で、でも…」

「必要としてくれる人が居ない、って言いたいのか？」

「…う、うん。」

「そんなのおまえが気付いてないだけだろ。」

「…ちがうもん。本当にいないんだもん。」

「いや、意外とどつかにいるかも…」

「だから！そんな人、本当にいないんだってば…！」

「…っだー！ー！！マジで分かってねーな！」

(ここに居るっつのー!!)

…とは言えない自分が情けない。

でも少し安心した。

彼女もこうして真正面から誰かに立ち向かえるんだ。

これなら時間はかかっても、きっと両親とも分かり合える。

「……………あ……」

数秒前まで威勢の良かった蘭の顔が再び青ざめた。

言葉にならない単語を発しながら、震える手でオレの方を指差している。

…しまった。

状況を理解するにつれ、血の気が引いていくのが分かる。

オレのすぐ背後に立っていたのは――

「きゃああああ……！」

蘭の悲鳴と同時に、右頬に当てられた冷たい感触。

視線だけ動かして目に入ったそれは、刃の部分に黒い錆があるナイフだった。

――あれから、何分経った？

たかが数分程度が、こんなに長く感じるなんてな。

……でも、まだ……

「じ、しんいち君…?」

抵抗する術は残ってる…!

—

15（彼の推理）

顔面を押さえながら怯んだ男。

カラフルに咲き乱れる花の上に落ちた血の付いた刃物。

傍らに転がるサッカーボール。

瞬間、スローモーションの様に見えた。

抱えていたボールを咄嗟に蹴り上げると、運良く男に直撃したのだ。

「ほつぺた、血が…！」

「大丈夫だから。走れ…！」

少し切れた右頬に痛みは感じなかった。

一人だったら、冷静では居られなかったかもしれない。
彼女が居たから。

ただ、それだけで――

強くなれた。

薄暗い電灯が点燈し始め、17時のチャイムが鳴り響く。

所詮大人の足から逃げられるはずは無い。

肩で呼吸をするオレ達とは対照的に、余裕すら感じる。

凶器こそ手放したものの、目の前に立ちはだかった黒い死神。
逆光で真っ黒な塊に見えるそれは、ゆらり、ゆらりと不気味に近づいて来る。

「し、しんいち君…」

野球用に張られた高いフェンスに、逃走経路は絶たれてしまった。
立ち向かえる武器も無い。

どうすれば、いい…？

どれだけ思考を巡らせても、何も思い浮かばない。

たった一人の女の子すら守れないのか？

経験も知識も全然足りない――

――「新一!!」

フェンスの外側から聞こえたのは、父さんの声だった。

「待つてろ、すぐ行く!!」

「新ちゃん!!」

振り返るとそこには、オレの両親と服部の両親。
飛び越えられない網の高さに、入り口まで迂回して行く。

ただ一人、小さな隙間から飛び込んで来たのは――

（服部!?!）

（こっちや!!!）

数十メートル離れた先に、子供なら通り抜けられる小さなフェンスの穴。

「ここへ来い」とジェスチャーで示す服部の姿に、犯人はまだ気付いていない。

そこまで辿り着ければ、逃げられる…！

…でも。

こいつが黙ってそれを見ているはずが無い。

（蘭ちゃん…あそこまで一人で行けるよな？）

（え…？し、しんいち君は？）

——「服部！」

「！？」

声に気をとられた犯人の隙をついて、蘭の背中を押した。

「今だ、走れ!!」

「う、うん!!」

次の瞬間、すぐに振り返った奴の黒い手が伸びる。
同時に覆いかぶさる黒い影と、息苦しさ。

「しんいち君!!」

「く、工藤!!」

響く二人の悲鳴。

呼吸が出来ずに、意識が遠くなる。
頭が真っ白になっていく。

見えるのは目深に被った帽子の隙間から見える、男の瞳^め。
見開いて血走った瞳から溢れていたのは――

涙だった。

男の背後に浮かんでいるのは、赤い満月。

必死に男の腕にしがみ付いて制止しようとしている、服部と…

――蘭。

また泣いてる…

そつえば結局、言えなかったな…

遠のく意識の中で、父さん達の声が聞こえた。

必死でオレの名前を呼びかける母さん達と、服部の声。

それと…

――

「あの後、すぐ病院に運ばれたんやけど…」

「…手遅れだった、って訳だな。」

…気分が悪くなるのは無理もないんだろう。

自分が「そうなる」瞬間なんて、普通思い出せるもんじゃない。

「……………」

「…姉ちゃんは、たぶん自分のせいやて責めたんやろ。お前と会った事も、あの事件も…」

全部忘れてしもてるみたいやった。それでもお前の家の前でよく一人で遊んでたゆうから、どこかでは覚えてたのかも知れんな。」

「そ、うか…」

「オレがあと数分早く着いてたら…すまん、工藤。」

「お前のせいじゃねえって。…嫌な思いさせちまったな。お前にも、蘭にも…」

「んな事ないわ。オレ、あれから探偵目指す事にしたんやから。…それに「また来る」いう約束も守れたしな。」

だから服部とは初対面な気がしなかったんだ。

こいつが笑うと、本当に何でもない事みたいに気分が楽になる。

今だって。

「でな。思い出させたんは、こっからの話の為や。工藤、自分が何て噂されてるか知つとるか？」

「どうせ幽霊だの何だのって好き勝手言われてんだろ。」

「いや、そこじゃのーて。」

「ああ？そこじゃなきゃどこだってんだよ？」

「上から2段目、左から4番目の窓…」

「え？」

「満月の晩には、工藤邸に幽霊が出るんやて。」

「なんだよ、それ？」

「…まだ、わからんのか？まあ、オレも信じられんけどな。お前がこうして目の前におるんや。」

いつの間にかコイツは米花町の子供達に聞き込みし、そんなくたらない噂話を収集していたらしい。
でも、だから何だって言うのか。

大して興味も無いけど、とりあえず耳を傾ける。

とにかく「あのシーン」を頭から振り払いたかったから。

忘れられない、最期に見た犯人^{あいつ}の表情^{かお}。

綺麗な空とは対照的な絶対的恐怖感。

何より、蘭を守りきれなかった。

当時の記憶が無くなってしまっなんて、どれくらいショックを受けたんだろう。

（あ、覚えてなかったのはオレも同じか…）

情けねー。

「友達になろう」なんて一言すら言えないで。
オレ、いつも蘭^{あいつ}には何も伝えなかったんだな…

泣きながら約束を解消した、あの日の蘭が浮かんた。

「あいつ、あれからまた泣いたんだろうな…」

「ん？なんやて？」

「いや…何でもねー。んで、結局その噂がどうかしたのか？」

「つまり、や。これはオレの推理に過ぎんのやけど……噂たつっ

ちゅーのは、つまりお前を見た奴が、オレと姉ちゃん以外にも存在するって事やと思わへんか？」

「…んな訳ねーだろ？この家がそれっぽくて誰も居ないからじゃねーの？」

「なら、これならどうや？噂の窓…あれ、何処の部屋が分かるか？」

「上から2番目…って事は2階だろ？それから、左から4番目だと…父さんの書斎、か？」

「そや…ほんで、お前がいつもおる部屋は？」

「………書斎、が多いけど…って、まさか…」

「そのまさか、の可能性があるうちゅーこっちゃ！駄目もとで試してみーひんか？」

服部の「推理」は常識離れしている。

いや、もうオレの存在自体が常識ではない時点で「常識」なんて何の説得力も無いけど。

でももし、あいつの推理通りだとしたら………

オレが今此処に居る意味が、はつきりと分かる。

その為に唯一与えられた期限^{じかん}があることも。

…
だけど
…

「それ」を果たした時、オレはどうなるんだ………？

|

16（彼と彼女の決意）

「なあ…服部…」

「どうした？」

「“それ”…やってみようぜ。可能性は低いし、嘘みてーな話だけど…価値は、ある。」

「せやろ？オレも協力するで！」

全てが予測でしか無い。

不安が無いと言ったら嘘だ。

願いを果たし、役目を終えた存在^{もの}がどうなるかなんて…

今までずっと、他人から見れば“それだけの事”に躊躇していた理由がそこにあるなら、たぶんこの予測は当たっている。

けど。

“それだけの事”の為に今自分が此処に居るなら、オレにとってそれは大切な存在理由なんだ。

「…なんやて？」

「まあ可能性だけだな。だったら今まで、どこかで引っ掛かった理由も説明がつくだろ？」

「け、けどな…工藤…」

「…決めたんだ。それでもいいって。だから、頼みがあんだけど…」

「……………」

「んな顔すんなって。お前なら分かるだろ？」

服部は俯き、掌を握り締めた。

唯一オレを救える方法だと思って東京まで駆けつけてくれたんだ。

無理もない。

「…この世界にさ。死ぬまでに自分の存在理由いきてるいみを見つけられる奴なんて、どれくらい居るんだろうな。恋愛だったり仕事だったり、人

によって色々あるだろうけどさ…それを見つけた奴って、ホント幸せだと思わねえ？」

——本音だった。

別に元気づけようとか、自分に言い聞かせた訳じゃない。

「そりゃー、あの時助かってたら…オレもお前みたいに探偵やりたかったし、今とは全然違ってたとは思っぜ？ だけど…」

自由に外へ出歩けたら。

もつと沢山の人と知り合つて、色んな経験して。

蘭に頼るんじゃない、本当の高校生探偵やつて…

言い出したらキリがない。

「でも。オレは幸せだったんだ。今の、オレのままで。」

世界で一番大切な子が、ずっと傍に居てくれたんだから。

確かに一度、あの時「工藤新一」の人生は終わったのかもしれない。だけど、もう一度与えられた。

そして自分の意味に気付けたんだ。

「案外、普通に過ごせてた方が大変だったかもな。蘭を放つという事件ばかり追ってさ。ヤバイ事に巻き込まれて帰って来れなくなったりして。その内愛想つかされたかも知れねーしよ。」

「そら、有り得るかもなア。」

お互いに笑い合った。

何があっても後悔なんかしない…オレはオレを「生き抜く」って決めた。

「まー、オメーもせいぜい和葉ちゃんに愛想つかされねー様に気をつけるんだな。」

「わ、わかつとるわ。ぼけ…」

「彼女と一緒に居られる時間は、こうしてる間にも1秒つつ確実に減ってるんだ…」

マジでさっさと言う事言つといた方がいいぜ？オレが言つのも変だけど。逆に妙に説得力あんだろ？」

「な、何言つてんねん！そんなんちゃうわ！！」

強がりな所が、まるで誰かを見てるみたいだな。
まあ後はコイツ次第だけど。

「けど…ほんまにええんか？」

「ああ。オレが決める事だから。これがオレなりの”幸せの定理”、
かな。」

「え？なんや？それ…」

「オメーみたいなお人良しの受け売りつてやつ。」

「ほー…^{おもろ}面白い事言つたもんやな。」

「頼みつてのはさ。調べて欲しい場所と、しておいて欲しい事の2
つなだけど…」

”…次の満月は12月10日…つまり今夜の23時36分や。”

確か満月って、新月と交互に約15日周期だったな。

”ああ。もし、お前の予想通りなら…約2週間ってトコやな…”

それだけあれば充分だ。

…後の事はやってから考える。

”今なら、まだ辞めたってええねんで？”

…決まってるんだろ？

このまま存在いきてたって何も変わらねえし…

”…わかった。けど…オレ、また来るからな。意味、分かるな？”

…分かってるよ。

また、会おうぜ？必ず。

ありがとな。

これが運命ってやつなんだ。たぶん。

忘れてた記憶は残酷だったけど…思い出せて良かった。
ずっと独りだと思ってたオレには、親友が居たこと。

心のどこかでは疑っていた両親の気持ち…父さんと母さんが、あの
時駆けつけてくれたこと。

本当に嬉しかった。

それと、最初に逢った時からずっと…何にも伝えられなかった、彼女。

あんな事件ことでも無いと話しかけられないなんて…

ごめん。

もしかしたら、もっと泣かせるかも知れない。
これからずっと辛い思いさせるのかも知れない。

だけど…

せっかくもう一度チャンスを与えられたから。

どうしても「証明」したいんだ。

オレにも意味があったって。

夕暮れの東京駅。

大きな荷物を持った人々。

混雑する改札から少し離れた場所で、私達は服部君を待っていた。

「あ、平次！！」

「……………」

「今から戻る」と連絡が入ってから、数十分。

現れた服部君の表情は暗かった。

和葉ちゃんや私の言葉なんて届いていないみたいに、俯いたまま。

「…平次？どないしたん？」

「…会って来たんや…親友にな。」

どこか寂しげに笑う彼。

急に、私は彼に両肩を掴まれた。

「…姉ちゃん。あいつの事…頼むで？」

「新一の事…？新一、何か言ってた…？」

「あいつの事は姉ちゃんが一番よう分かってるやろ？」

「え？」

「オレ、約束したんや。また来るって。だから…」

「はつとり、君…？」

呟いた彼は、言葉を濁した。

でもそれは一瞬で、何かを切り替えた様にニツコリ笑ってみせる。

「ほんじゃー帰るか！行くで和葉！」

「へ？あ…じゃあな、蘭ちゃん！またいつでも電話してや！」

「うん。2人とも気をつけてね。今日はありがとう！」

…結局、服部君には聞きそびれてしまった。

（あの話って…やっぱり…）

知ってる気がする。でも、思い出せない。

何だろう…胸の辺りがもやもやして、気持ち悪い感覚。

思い出さない方がいい事なのかな…？

「新一…」

…会いたいな。

彼と会えない毎日は、一日一日が凄く長く感じる。

気づくとまた私は空を見上げていた。

丸い月がぼつん、と浮かぶ、晴れ渡った空――

――家に着いて夕飯が終わる頃、大阪へ着いた和葉ちゃんから電話が来た。

帰りの新幹線で、服部君に告白されたんだって。

嬉しいのにどうしたらいいか分からない、と泣きながら話す和葉ちゃん、急な事でパニックになっちゃったみたいだけど…

「本当に良かったね、和葉ちゃん！」

『で、でも…返事、アタシどうしたらええか…』

「簡単、でしょ？」

『へ？』

「和葉ちゃんの気持ち、全部伝えればいいのよ。言葉にして、ちゃんと！」

『そ、それって…』

「…私、凄く勇気貰ったの。ありがとう、和葉ちゃん。」

—— 彼に、会いに行こう。

ちゃんと言葉にして伝える為に。

またフラれちゃっても…まだ、伝えてない事があるから。

大きな月を見上げながら、心に誓った。

17（赤い月が消える夜）

嘘………？

ずっと想い続けていた人。
世界で一番会いたかった人。

そして、此処に居るはずのない人が………

「……どうして……？」

差し出されたその手を、拒めるはずなんてない。

どんな理由でも。

あの日から変わらない、優しい笑顔。

…もうずっと、何年も何十年も会えなかったみたい。

泣かないと決めたのに。
溢れる涙が止まらなかった。

――17（赤い月が消える夜）――

「…お父さん？私、ちょっと出掛けたいんだけど…」

夕食の片付けなどの家事をこなし、気付けばもう時計は23時を過ぎていた。

怒られるのは分かっているけど、黙って出て行くのも気は引けた。

付けっぱなしのテレビでは、女性アナウンサーが興奮気味に何かをレポートしている。

それには無反応でテーブルに突っ伏したお父さんの姿。

（あーあ。また…）

大量に散らばっているビールの空き缶で悟る。
また飲んだまま寝ちゃったのか…

缶を片付け、テレビを消して。
ちょっと叱ってやろうと顔を覗き込んでみると、むにゃむにゃ寝言を言いながら、気持ち良さそうに寝ている。

（ホント仕方ないなあ…）

もう12月。暖房の無い部屋では白い息が出る季節なのに。

薄着で眠るお父さんの為に、毛布を取りに部屋へ向かった。

「うわ、こんな散らかしてる！もぉ…」

元々いくら片付けてもすぐに汚くなってしまふ部屋だけど、今日は一段と散らかっていた。

散乱し、山積みになったアルバムの数々。

目に留まったのは、まだお母さんが出て行く前の幼い私の写真だった。

「わー、懐かしい!」

今より若いお父さんとお母さん。

歩き始める前の、お母さんに抱っこされた私…

何気なく手にしたアルバム。

その中から思いがけないものを見つけて、手が止まった。

「…え?こ、これって…」

そこに映るのは、一人の男の子。

私は、彼をよく知ってる……………

「しん、いち…?」

どうして私の家にあるの？

今の彼が写真に映るはずないから、これは私が彼に出逢うより前のもの…

（お母さん達は新一の両親と友達なんだし、別に変じゃないよね…？）

でも何か引つかる。

だって私の両親が、新一の写真を貰う理由なんて…

それに私、お父さんやお母さんから新一の話を聞いた事なんてあつたっけ…？

「ねえお父さん？ちよつと聞きたい事があるんだけど…」

すぐに部屋に戻り、肩を叩きながら呼びかけた。

お父さんは眠たそうにしながら、何とか意識だけは取り戻したらしい。

どこまでシツカリしてるかはイマイチ分からないけど。

「今、お父さんの部屋でアルバムを見つけて…」

「あー、アルバム…？そりゃー昼過ぎ、妙な高校生がどうしても見せて欲しいって頼んで来てよ。

蘭が小さい頃の知り合いかも知れねえから、確かめたいって…」

「…誰だろ？もしかして…服部君？」

「はつとり…？そっぴやアそんな名前だったかな。色黒で、野球帽被った…」

それから、子供の頃の蘭について色々聞いてきやがってな。」

「ね、ねえ！この男の子の写真は？！」

「あ？」

新一の写真を目の前に出すと、お父さんの表情は変わった。

急に酔いが覚めた様な真剣な眼差しに、私は確信する。

「…やっぱり。何かあるのね…？」

お父さんは差し出された写真を受け取り、しばらく複雑な顔で見つめていた。

それから何かを覚悟したように、真っ直ぐに私を見た。

「あれからもう11年経ったか。」

「…？何の、話…？」

「それは英理が有希ちゃんから貰って来た、有希ちゃんの息子の写真だ。名前は…」

「…新一？」

「え？思い出したのか？あいつの事…」

「…思い出した？」

「…うん。分からない…分からないけど…何かがずっと引っかかっているの…」

きつと、とても大切な事。

どうしても開けなければいけない記憶の蓋。

「…お願い。全部、話して…？」

「…そうだな。もう高校生だし…そろそろ話してもいいだろうよ。」

「……………」

「英理や有希ちゃん達と話し合って決めてたんだ。蘭が自然に思い
おまえ
出す時まで見守ってようってな…」

——「…俺達が悪かったんだ。仕事ばかりで、いつも蘭を一人で留守番させ続けていた。」

お前は昔から手がかからなくて、しっかりした娘だと勝手に思い込んでいたんだ。

俺達のせいで蘭が苦しみ、逆恨みしたあいつに狙われるなんて…情

けねエ事に考えてなかったんだよ。

11年前の、あの日。

蘭が事件に巻き込まれたと連絡を受けて、すぐに英理と病院に向かった。

…怪我したんじゃないかって心配してたんだけど…お前は無傷だった。

犯人も無事に逮捕された後だった。」

11年、前。

私と新一が彼の家で出逢うより、前の事…？

お父さんから紡がれる言葉の一つ一つが、少しずつ記憶の蓋を開けていく。

「あのボウズが…お前を守ってくれたんだって、聞いた。有希ちゃん達は泣きながら、こう言っただ。」

蘭には、新一の分まで生きて欲しい……ってな。」

「……………え？」

——それって、つまり。

新一は、私を守って——？

——私の、せいで。

全てを、失った……………？

…どうして私は忘れていたの？

こんなに……こんなに大切な記憶……！！

噛み締めた唇から、血の味がした。
握り締めた掌に、爪が突き刺さる。

でも。こんなじゃ足りない。

そのせいで新一は、今までどれだけ辛い思いして…

彼の苦しみは。
葛藤は。

こんなじゃ全然——！！

——「蘭——」

気がつくと、お父さんが私の両肩を強く揺さぶっていた。

「お前、今何考えてんだ？」

「わ、…………私の、せいで……………」

「…それは違うぞ？蘭…」

開放された両肩から、力が抜ける。
少しでも気を抜いたら倒れてしまいそうだった。

「…あの時、新一とお前の他にもう一人…新一のダチが居たんだ。
事件の一部始終はそいつから聞いた。

新一はな、自分から蘭を守ったんだよ。

巻き込まれたとか、お前の代わりに犠牲になったとかじゃなくな…」

「…う、嘘…」

「嘘じゃねエぞ？有希ちゃん達もその場面、見てたって言うし…
だから蘭は新一に罪悪感を感じて生きるんじゃない、新一の分まで
前向いて生きて欲しいって…
有希ちゃん達が願っているのは、そういう意味なんだよ。」

「……………」

「蘭がそれを受け入れて「生きる」事が新一の為なんじゃねエのか？俺達は…あいつに感謝してる。英理が写真を貰ったのも、それを忘れない為だ。」

彼と出逢えた事には…必ず、意味がある。
そう、分かつてはいたけど…

…頭の中が真っ白になる。
色んな思いがぐちゃぐちゃになって、何も考えられない。

「…お父さん。だから刑事辞めて、自宅に事務所作って…私と一緒に居る時間、作ってくれたんだね…」

「え？あ、ああ…まあ英理とは別居になっちまったけどな…」

本当に全部、彼のお陰だったんだ。

「…私、ちょっと出かけて来る。」

「お、おい?!今からか?!」

お父さんの声は届かなかった。

すぐに上着を羽織り、玄関を飛び出す。

事務所の前を通り過ぎ、さらに階段を駆け下りた。

——ごめん。

ごめんね…新一。

——全部、私の為だった。

彼が未来を全て失って守ってくれたのは、私の現在^{いま}だった。

「新一は弱音を吐かない。強いから。」…?

苦しかったに決まってる。辛かったに決まってる。

もしかしたら、誰も居ない場所で独りで泣いた事もあったかもしれない

ない。

「私はこんなに、新一だけを見てるのに。新一は何も分かってない。」？

違う…違うよ。

新一は今でもずっと私を…私だけを守ってくれてたんだ。だから言わなかった。

言えなかったんだ。

彼の本当の気持ち、全然分かってなかったのは……私の方だ。

彼を想う時、自然と癖になっていたこと。

空を見上げた。

「……え？」

服部君達を見送り、帰り際まで浮かんでいた大きな満月が――

その光を失い、ぼうつと赤く雲の合間に潜んでいる。

いつも見上げていた空の、いつもと違う様子に胸騒ぎがする。

思い違いなんかじゃない。

だって。

「皆既月食、だつてさ。」

ずっとずっと逢いたくて。
胸いっぱい焦がれ続けた人。

此処に居るはずのない、彼が…

「これが終わったら、また数年先まで見れねーらしいぜ?。」

目の前に――

「…どうして…？」

「…なあ蘭、お前これからどこか行くのか？」

どうして此処に居るの？

どうして？

聞きたい事は沢山あるのに。

「…新一に、逢いに行こうと思ったた。」

私の言葉に、彼は笑顔をみせた。

「…あのさ。行きたいところがあるんだけど。」

もう泣かないって決めたのに。
壊れちゃったみたい。

涙がぼろぼろ零れ落ちる。

「一緒に来て、くれる？」

その笑顔も、声も。

やっぱり大好きだよ。

差し出された手を拒めるはずなんてない。

「…うん。もちろん。」

どこへだって行くよ？

貴方と一緒になら。

—

18（邂逅）

夢だと何度も錯覚した。

絶対に叶わないと思っていた。

私達の思い出は全て、同じ場所。

どこか閉鎖的なあの洋館は、外部から遮断された秘密の空間。

それとは真逆の、イルミネーションで飾られたキラキラした街灯。
夜空に浮かぶ赤い満月。

確かに隣に居る――

彼。

そのどれもが、到底現実感が無かった。

夢なら二度と覚めなくたっていい。

本気でそう願った。

――18（邂逅）――

シャッターが閉まった商店街は、人の気配が無い。
いつもの通学路が、まるで別世界の様に思える。

吐き出す息は白く、指先が痛い。

それでも、彼の手にしっかりと包まれている右手だけは暖かった。

「ねえ…何処に行くの？」

「言わなきゃ来てくれねえの？」

「…そんなこと…ないけど。」

――相変わらず。

”すぐに分かるよ”と答えてくれない。

ほんと素直じゃない。

子供みたいに意地悪。

（でも、人の事言えないか…）

私だって、彼に逢う直前まで固く決意した事を、今だに言葉に出来ずにいた。

彼がこうして外に出られた理由わけも知りたいけど…

まず、謝るべきだね？

新一の気持ちも考えずに、”好き”って言うてくれない彼を責めた。それと、子供の頃に私を守ってくれたこと…

私を助けさえしなければ、彼は今普通の高校生だったはずなんだから。

彼が守ってくれたから、私は今幸せだっていうことを忘れてしまっていたんだから…

「蘭…」

「…なに？」

「…その…ゴメンな。」もう来るな”とか言って…」

「…え？」

「本当の事言ったら…自分でも嫌ってくらい勝手なんだ。だから言えなかった。」

——違つよ。

「勝手なのは…私だよ。」

今の私が、どれだけの犠牲の上に成り立っていたのか。
そんなの考えた事も無かった。

当たり前前に両親が居て、当たり前前に親友が居て、当たり前前に今日も生きてる。

もしも、新一が助けてくれなかったら？

そのどれもが今此処に、存在しないのに。

「全部…聞いたの。お父さんから。新一のこと…」

「…そっか。」

「…ごめん、なさい…どうして私、忘れてたんだろう…」

あれだけ泣いたはずなのに、涙は枯れない。

―どうにか、出来なかったの？

彼も一緒に、こうして隣を歩ける日々。

どうしても手に入れられなかったの…？

沢山の”もしも”が浮かんで、消えない。

私が公園へ行かなかったら。

彼が公園へ来なかったら。

犯人がもっと早く捕まっていたら。

あと数分早く、彼を助けられたら…

原因^{わけ}を突き詰めればキリがない。

「…お前さ、それこそ忘れてない？オレだって覚えてなかったんだぜ？」

頭をぽん、と優しく撫でられた。

「仕方ねえよ。あれだけの事…子供が見たらトラウマになるっつの。」

あ…でもアレを動力源に探偵になった奴も居たらしいけどな。」

―笑ってる？

何でも無かった事みたいに…

「こればっかは原因考えたってキリがねーだろ？最終的に”逢わなきゃ良かった”なんて結論出したところで、蘭は満足するか？」

「それは…や、ヤダ。」

新一と出逢わない人生なんて考えられない。
そんなの想像するだけで…怖い。

こんなに誰かを好きになれるなんて、きっと誰もが経験出来る事じゃないから。

「それに、あの時は…オレがお前を守りたいって思ったんだ。その結果はオレ自身の責任なんだし、蘭は気にする事ねえよ。」

「…頭では、分かってても…そんなの、無理だよ…」

「……………だよな。」

彼は困ったように、ばつが悪そうな顔をした。

” 気にするな ” と言われて気にしないで居られる程、些細な事じゃないんだから。
当然。

数秒の沈黙の後、彼が切り出した。

「 ……蘭、今までの ” 約束 ” ……覚えてるか？ 」

「 うん。 ……当たり前、でしょ？ 」

私が彼に誓った約束は、 ” 彼を独りにしない ” 。
彼が私に誓った約束は、 ” 黙って離れたりしない ” 。
二人で誓った約束は、 ” いつか一緒に本物の空をみよう ” 。

だけど、あの日に…

「自分で”解消しよう”って言った癖に、だけど…まだ、間に合ったり…しねー、かな…？」

「…し、新一さえ良ければ私は…」

「本当にごめんな。…今から果たそうぜ。…全部。」

「へ？ぜ、全部って？」

立ち止まった彼につられて足を止めた。

目の前に佇むのは――

――帝丹高校。

「こ、此処って…」

「ま、いーからいーから…こっち。」

正門から迂回し、裏門へ回る。

何故か鍵は開いていて、すんなりと中へ入れてしまう。

「か、勝手に入ったら怒られるんじゃない…」

「見つければな。」

毎日通っている場所なのに、夜というだけで見慣れない空間に変化してしまう。

最初は真っ暗で怖かった校舎も、目が慣れてしまえば居心地良く感じるから不思議だ。

「”感謝しろ”って関西弁が聞こえてきそうだな…」

「何か言った？」

「何でもねーよ。」

足音がしない様に階段を上っていく。

窓から見える赤い月をみて、想った。

―ずっと新一と、こうして学校に来てみたかった。

小学校も、中学も、高校も。

もし彼が一緒だったら？

苦しい事もあったかもしれないけど。

きつと、きつと楽しかった。

途中、彼の袖を引いて引き止める。

「…新一。ちょっと寄りたいたところがあるんだけど…いいかな？」

私が指差した先には、ある教室。

入り口に掛けられているのは”1 - B”の文字――

「因数分解」、”2次関数”、”三角比”…」

「…面倒でしょ？私、数学苦手だから大変なの。」

「何で？面白そうだけど…」

「あ、そう…」

微かな月明かりだけが照らす教室。

数学の教科書をパラパラ捲りながら、彼は学校の勉強に興味深々だった。

何故か手にするのは数学や物理。

文系の私とは、ことごとく正反対の好みらしい…

楽しそうな彼をぼーっと眺める。

新一は”約束を果たす”って言ってたけど…その場所に帝丹^{こく}高校を選んだのは、私の小さな願いを叶える為でもあったんだ。

新一とこうして過ごすのを、今まで何度も夢見ていた事…彼は気付いていたから。

やっぱり、優しいんだ。

…そういえば。

今まで一度も家を出られなかった新一は、どうして今日は出て来られたんだろう？

もしかして、これからずっとこうして居られる？

ずっと傍に居られるなら…

それなら、私は――

「…なあ、この席つてもしかして…」鈴木園子”の席？」

教科書を閉じた新一が指差したのは、彼自身が座っていた私の隣の机。

突然目が合ったから、思わず赤くなってしまった。

…暗くて、良かった。

「そうだけど…良く分かったね？」

「まーな。」

その問いかけに、何故か素っ気無く答えた彼は急に黙ってしまう。
私も何だか緊張してしまって、心臓の音が新一に聞こえるんじゃないかと心配になった。

「…蘭に話さなくちゃいけない事、いっぱいあるんだ。」

「…私も…新一に伝えたい事があるの。」

赤い月が光を取り戻し始める。
時は確実に、微量ずつ消費されていく。

私が笑っていても、泣いていてもお構いなしに回る世界。
生きていても居なくても、何も変わらない世界。

——カミサマ。

貴方がもし、本当に存在しているなら——

いつか消えてしまう、一人の人間のちっぽけな運命なら

せめて最期は、彼の傍に居させてください。

|

19（最後の約束）

小さな町の、小さな公園で”事件”^{それ}は起こった。

いくら警察が調査しても、逮捕に至る足掛かりすら掴めなかった連続殺人犯。

誰もが慄然とするその存在から、ひとりの少年がひとりの少女を守り、命を失ったのだ。

ニユースは連日報道され、人々は少年の勇気を称え、幼く尊い生命が奪われた事に胸を痛めた。

”私達は、この少年を決して忘れないでしょう”

ある評論家が涙目でコメントした。

——— 実際は？

最初から何も無かった様に、再び平和が訪れた町。
少年の記憶は薄れていく。

毎日公園へ手向けられた沢山の花は減っていき、数年後には閉園となり、道路に変わった。

ゆっくり、でも確実に。

例え実感は無くても、今、こうしている間も。

消費され続ける時間によって人は…いつか忘れてしまう。

”事件”^{それ}を知らない小さな子供達は、やがて”彼”をこう噂し始めた。

”怖い怖い幽霊だ”

確かに存在していた”彼”は、それを知って…どんな思いで過ごしたんだろう。

どうして存在^{いきて}するのか、”彼”自身も忘れてしまっていた。

目的も、意味さえも分からないまま。

ただ存在だけはしてなくちゃいけない、なんて。

”永遠に続くと考えたら怖くて仕方なかった”と”彼”は自嘲気味に笑った。

「…でも、やっと思いついた。

”理由”を果たしたら、たぶんオレは………」

——19（最後の約束）——

事件の日は、今夜と同じ。

月光が2000分の1に激減し、満月が赤銅色に変化する夜——

皆既月食だった。

”満月の夜『あの窓』のある部屋に人影^{ゆうれい}が出る”

妙に具体的なこの噂に、疑問を持った服部君は考えた。

”本当に目撃者が居るんじゃないか？”

そして周囲の聞き込みから、確かな目撃証言^{それ}がとれる。
決まって証言^{それ}は、数年に一度の…
皆既月食の夜。

つまり新一は、”その日”だけは彼が望む”ふつつ”に戻れるんじゃないか？

まさに机上論だった、半信半疑の提案が。

「…まさかの的中^{ちゆう}ってわけ。」

簡単な謎解きの答えを、思いがけず見つけてしまった。
それくらい、まるで日常会話の様に話す彼に違和感を感じた。

「じゃあまた数年待てば…次の皆既月食の日が来たら、今夜みたい
に一緒に空を見られるんだよね…？」

だから、確かめる為に問いかけた。
欲しい答えは決まっている。

私が欲しい答えは——肯定。

「…それは…」

小さく呟いて、彼は夜空を見上げた。

12月の澄んだ空は星がよく見える。
思わず溜め息が出そうだ。
あまりに大きくて、広くて、遠い…絶対に手に入らない輝きに。

届かないと分かっているのに、人はどうして手を伸ばしたくなるん
だろう。

一種の現実逃避、なのかもしれない。

私は………

彼が濁した言葉の続きを聞きたくない。

「…やっぱりすげえな。本物の空…」

「守れたね…約束。」

「…ああ。絶対叶わないと思ってた。」

屋上^{こゝ}からは米花町がよく見渡せる。

遠くに聳え立つ高層ビルや東都タワー。

フェンスに寄り掛かり、赤く点滅する航空障害灯を眺めた。

「…寒くねえ？」

「…ん。少し。」

理由は何でも良かった。

もう少しだけ、傍で…距離を近づけたかった。

指を絡めて、彼の左手をぎゅっと握る。

新一も強く握り返した。

「知らなくちゃいけない事実^{もの}。」

私達二人が、どうか真っ直ぐに受け入れられる様に。

「…分からなかったんだ。どうして自分が存在してるのか。
確かに終わったはずの”一度目”を、こんな形にしてまで繰り返す理由が…」

でも、やつと思い出した。オレは最初から、お前にずっと伝えたい事があって…」ただそれだけの為”にもう一度、此处に居るって。」

——いつか…もしかしたら。

それは新一に出逢った時から、覚悟するべきだった。

でも彼に出逢ってから、あまりに毎日が楽しくて、ときどきして。

想像すら出来なかった。

「…蘭をまた傷つけるかもしれない。」

「…ただ…これがオレの唯一の”存在理由”だから…」

あの日彼に別れを告げられて、初めて思い知らされた。

”嫌。絶対に嫌。

新一と、離れたくない。”

…だけど。

「……………全部、伝えたいんだ。」

これが『彼が私に誓った約束』。

新一は優しい笑顔を浮かべる。
それが余計に胸を締め付けた。

時間が止まればいい。

今、この瞬間に世界が終わりを告げればいい。

叶うはずもない願いを、心の中で願い続けた。

彼の言葉が刻まれる度、胸の鼓動が早くなる。
意識して呼吸しないと息が出来ない。

唇を噛み締めて、全身の震えを押さえ込んだ。

それでも、涙は勝手に溢れ落ちてしまう。

「新一は…それが本当に一番幸せなんだよね？
心から…自分に嘘つかないで、後悔したりしないんだよね？」

「…決まってるだろ。」

そつと涙を拭ってくれる温かい掌。
冷え切った頬に熱が伝わって、心地よくて。

真っ直ぐに見つめる瞳と、視線が合う。

涙が、止まらない。

悲しいからじゃない。

——こんなにも愛しい。だから。

「オレは蘭が好きだよ。お前が想像してるより、ずっと。」

身体に留めて置けない想いが、溢れる。

お願いだから…もう流れ落ちないで。

ずっとここに居て。

この心^{おもい}だけが唯一、彼が存在している証なら。

私の中に留めていたい。

「…泣くなよ。」

「だ、だって…」

「蘭に…傍に居て欲しいんだ。」

”最期の——最後”、まで。

自分の事ばかりで…ホント我儘なのは分かってんだけど…

オレの”彼女”になって下さい。」

一度だけ頷くのが精一杯だった。
最後の距離^{キョリ}を一步踏み出すと、解放された様に抱き合った。

「……………蘭、」

彼の言葉を、振り払う様に遮る。

「……………連れてって。」

「…え？」

「”約束”通り…新一を独りになんてしないから。
ずっと…傍に居る。新一と一緒に居るから…
連れてってよ……………っ!」

すぐるように、彼の腕の中で泣き続けた。
困らせるのは分かってる。

だけど、どうしようもなく。

例えどんなカタチだって、彼の傍に居たい。

伝えなかった。駄目だって言われても、伝える為に逢いに来たから。

…我儘なのは私だ。

260

本当は、知ってる。彼の気持ちも…
今の私はどうしても捨てられない、大切なものに囲まれている事も。

「…オレだって連れて行きてーよ。出来るならさ…」

「だったら——」

——「けど、それ以上に…生きていて欲しい。
両親とか、友達とか…お前を必要としてる人が沢山居る、この世界で。」

それは、彼が与えてくれた…
私の”存在理由”^{シアワセ}。

新一が居ない世界の…宝物。
彼の想い、そのものなんだ。

「…蘭、あのさ。」

「…え？」

「オレの事…忘れんなよ？」

「…言われなくなつて…」

「絶対？」

「絶対。」

「誰が何て言っても？」

「決まってるでしょ。」

「お前がいつか100歳のばーちゃんになって死ぬまで？」

「…な、何よそれ？もう、分かったってば——」

思わず、彼の腕から逃れた瞬間。

ふいに優しくキスされた。

…誓いのキス、だ。

「…やっと全部、解けたのに恵りーけど…また繋いでいい？」

「……………ずるいよ。」

最後の”約束”だった。

彼を忘れず”生きて”いくこと。

彼の真意は違う。

私が独りでも道に迷わない様に、標してくれたんだ。

彼に繋がれる枷なら、それでも構わない。

「…新一。」

「…怒ってんのか？」

「大好き。」

「え？」

少し動揺した彼が可愛くて、またぎゅっと抱き締める。

まだ、本当の実感なんて沸かなかった。

心の何処かでは”このまま一緒に居られるんじゃないか”って…
その安易な期待が、どうしても捨てられなかった。

だって、彼は確かに此処に居て。
笑いかけてくれるのに。

「蘭……………ありがとう、な。」

――
新一が家から出られたのは、その夜だけだった。
私は今まで以上に彼の家へ通う様になり、出来る限りの時間を一緒に過ごしていた。

――
一見前と変わらない日々が過ぎていく。

――
数日経ったある日。
彼の異変に気付いた。

――
そして残酷な現実を思い知らされる。

私には、聞こえなくなってしまったのだ。

目の前に、確かに居る新一の――

彼の、声が。

――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0973y/>

空の落書き

2011年12月19日06時46分発行